

立
矛
遺
跡

立矛遺跡

—市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2
0
1
1

新潟県長岡市教育委員会

2011

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

立矛遺跡

—市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は新潟県長岡市来迎寺字原 3400 番地ほかで実施した、立矛遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の原因是長岡市による市道越路 445 号線改良工事であり、調査主体は長岡市教育委員会である。
3. 遺跡確認試掘調査に要した経費は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫補助金の交付を受けた。本発掘調査に要した経費は原因者である長岡市が負担した。
4. 遺物の注記は以下のとおりである。

遺構覆土出土（個別）	遺跡略号（TB）+調査年度（11）+遺構番号一個別番号
遺構覆土出土（一括）	遺跡略号（TB）+調査年度（11）+遺構番号
包含層出土（個別）	遺跡略号（TB）+調査年度（11）+個別番号
包含層出土（一括）	遺跡略号（TB）+調査年度（11）+大グリット名
5. 遺構番号は、遺構略号+調査区全体の通し番号とした。ただし、掘立柱建物跡（S B）は柱穴群を包括する纏まりとして扱ったため、他の遺構に付けた通し番号とは別に番号を付けた。
6. 遺物の個別番号は、調査区全体の通し番号とした。
7. 遺構平面図は光波測量で作成し、航空写真測量によりこれを補った。遺構断面図は簡易造り方実測(1:10)で作成した。
8. 土壌の締りと粘性については、5段階区分で観察・表記した。締り、粘性とも(1)が最も悪く（弱い）、(5)が最も良い（強い）。図版中の表記もこれに拠っている。
9. 写真的加工、挿図の作成には、Adobe Systems の Illustrator および Photoshop を使用した。
10. 本書は本文と巻末図版とで構成される。
11. 執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 新田康則（長岡市教育委員会）
第Ⅱ章 北村和徳（株式会社シン技術コンサル）
第Ⅲ章 石坂圭介（株式会社シン技術コンサル）
第Ⅳ章 遺構=石坂・土器=北村・石器=新田
第Ⅴ章 新田

- なお、編集については石坂が担当し、新田が総括した。
12. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
 13. 調査の体制は以下のとおりである。

調　　査　主　体	長岡市教育委員会	教育長 加藤孝博
事　　務　局	長岡市教育委員会科学博物館	（館長 山屋茂人）
調　　査　担　当	長岡市教育委員会科学博物館	主　任 新田康則
調　　査　員	石坂圭介（株式会社シン技術コンサル）	
	北村和徳（株式会社シン技術コンサル）	
土木作業管理者	森山純一（株式会社シン技術コンサル）	
調　　査　補　助　員	遠藤昌代・山崎聖子	
発　　掘　作　業　員	青柳健一郎・青柳政則・池田一…・伊師志郎・伊師文江・今井義次・内山良子・	

大塚忠春・小川清一・金子士郎・小林重春・小林 茂・郷 武治・酒井亀太郎・
佐藤伸夫・佐藤尚雄・間 久平・新保 畏・内藤正則・永井邦夫・永井重喜・
中沖直治・中村熊雄・西澤和一・西澤 仁・田中幸雄・田中 保・田中康夫・
富田政勝・長谷川久司・深井政由・深井恒博・徳刈新一・徳刈久男・丸山光男・
丸山幸雄・山崎栄子・山岸 弘・山崎正幸・若林 実

整 理 作 業 員 遠藤昌代・白井綾子・山崎聖子

14. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。(五十音順・敬称略)
- 神林昭一・駒形敏朗・佐藤雅一・間 雅之・高橋久美子・竹部佑介・長澤辰生・難波 守・藤波啓容・
水島 番
有限会社アルケーリサーチ・国際石油開発帝石株式会社国内事業本部新潟営業所・有限会社越路地計
株式会社信濃技術・永井工業株式会社・社団法人長岡シルバー人材センター・
新潟県教育庁文化行政課

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	8
1 発掘調査の方法と経過	8
2 整理作業の経過	9
第Ⅳ章 調査の成果	10
1 検出遺構と出土遺物の概要	10
2 基本土層	10
3 検出遺構と遺構出土遺物	11
(1) 検出遺構の分布	11
(2) 掘立柱建物跡	11
(3) 集石遺構	13
(4) 土坑	13
(5) 構状遺構	14
(6) ピット	15
4 包含層出土遺物	18
(1) 出土土器の分布状況	18
(2) 土器	20
(3) 石器	22
第Ⅴ章 まとめ	23
1 はじめに	23
2 遺跡の保存状況	23
3 調文時代晩期以降における遺跡の変遷	23
参考文献	32

挿図・表目次

第1図 試掘・確認調査トレンド位置と本調査区域	1
第2図 遺跡の位置	3
第3図 周辺の遺跡(縄文時代前期～弥生時代)	4
第4図 S S 2 の礫	13
第5図 土器群別分布	19
第6図 石器種別分布	19
第1表 周辺の遺跡(縄文時代前期～弥生時代)(1)	5
第2表 周辺の遺跡(縄文時代前期～弥生時代)(2)	6
第3表 周辺の遺跡(縄文時代前期～弥生時代)(3)	7
第4表 作業工程	9
第5表 掘立柱建物跡	25
第6表 掘立柱建物跡間連ビット	25
第7表 集石遺構	25
第8表 土坑	25
第9表 溝状遺構	25
第10表 その他ピット	26
第11表 性格不明遺構	26
第12表 土器観察表(1)	27
第13表 土器観察表(2)	28
第14表 土器観察表(3)	29
第15表 土器観察表(4)	30
第16表 土器観察表(5)	31
第17表 石器観察表	32

図版目次

図版 1 遺構全体図・土層柱状図
図版 2 個別遺構図①
図版 3 個別遺構図②
図版 4 個別遺構図③
図版 5 個別遺構図④
図版 6 個別遺構図⑤
図版 7 個別遺構図⑥
図版 8 個別遺構図⑦
図版 9 個別遺構図⑧
図版 10 個別遺構図⑨
図版 11 個別遺構図⑩
図版 12 個別遺構図⑪
図版 13 個別遺構図⑫
図版 14 個別遺構図⑬
図版 15 個別遺構図⑭
図版 16 個別遺構図⑮
図版 17 遺構出土土器実測図①
図版 18 遺構出土土器実測図②・ 包含層出土土器実測図①
図版 19 包含層出土土器実測図②
図版 20 包含層出土土器実測図③
図版 21 包含層出土土器実測図④
図版 22 石器実測図

写真図版

写真図版 1	調査写真①
写真図版 2	調査写真②
写真図版 3	調査写真③
写真図版 4	調査写真④
写真図版 5	調査写真⑤
写真図版 6	調査写真⑥
写真図版 7	調査写真⑦
写真図版 8	調査写真⑧
写真図版 9	調査写真⑨
写真図版 10	調査写真⑩
写真図版 11	遺構出土土器写真
写真図版 12	包含層出土土器写真①
写真図版 13	包含層出土土器写真②
写真図版 14	包含層出土土器写真③
写真図版 15	石器写真

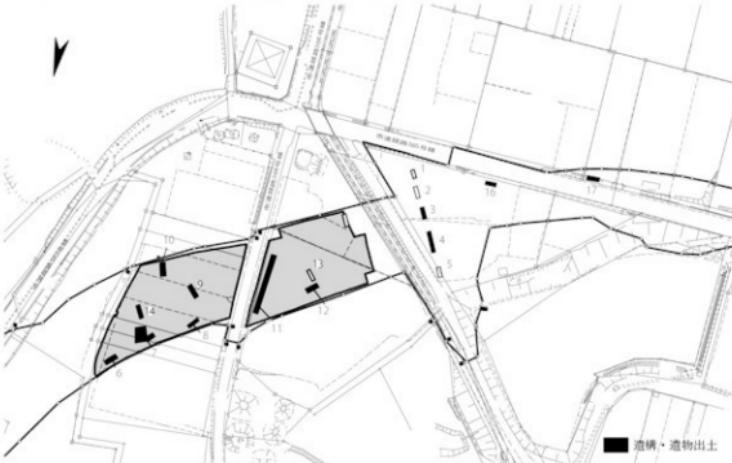
第Ⅰ章 調査に至る経緯

調査は市道越路445号線建設工事に伴って実施したものである。市道越路445号線建設工事（延長1,497m）に伴う埋蔵文化財の取扱いは平成14年度から始まり、第1工区（延長500m）に係る措置として、平成19年に浦畠遺跡の本発掘調査を実施した〔長岡市教委 2008〕。立矛遺跡周辺に係る取扱い協議は第2工区（延長380m）についてのもので、平成19年2月から開始した。この協議に資するため、平成22年4月に試掘調査、さらに11月には確認調査を実施した。

試掘調査 平成22年4月22日付け長教博第31号で新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長と略す）に文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を報告し（以下、着手報告と略す）、平成22年4月26日に調査を実施した。5箇所でトレンチ調査を行い、3・4Tから縄文時代～弥生時代前期の土器・剥片が出土、さらに4Tでは土坑を検出した（第1図）。この結果によって立矛遺跡の範囲を拡大し、その旨を平成22年5月13日付長教博第51号で県教育長に通知した。

確認調査 平成22年10月26日付け長教博第245号で県教育長に着手報告を行い、平成22年11月24・25日に調査を実施した。12箇所でトレンチ調査を行った結果、ほとんどのトレンチから遺物が出土し、いくつかのトレンチでは遺構も確認した（第1図）。出土遺物は弥生土器（中期後半～後期）が多く、縄文土器（前期・中期・晚期）も加わる。さらには被熟縛や破碎縛、少量の石器（剥片類）が伴う〔長岡市教委 2011〕。

取扱い協議から本発掘調査着手まで 調査の結果を踏まえ、長岡市越路支所建設課と長岡市教育委員会は立矛遺跡の取扱い協議を進めた。しかし、計画変更が極めて困難であり、本発掘調査を実施し、記録として遺跡を保存する方針を固めた。本発掘調査対象区域は6～15Tを含む範囲とした。平成23年2月8日付け長越建第179号で法94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知がなされ、これに対し、県教育長から平成23年3月22日付け教文第1148号により工事着手前に本発掘調査を実施するよう通知があった。その後、平成23年5月9日付け長教博第48号で県教育長に着手報告を行い、本発掘調査を開始した。



第1図 試掘・確認調査トレンチ位置と本調査区域（1:1,500）

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置と地理的環境（第2図）

本遺跡は新潟県長岡市来迎寺地内に所在し、信濃川から直線距離で約 2.9km、渋海川から約 0.8km 離れた河岸段丘上に位置する。調査区は東側で標高 83.3m、西側で標高 87.3m、東西間約 140m で両端の高低差が 4m という緩斜面地である。本調査以前は畑地として利用されていた。遺跡の西から南方向も田畠が広がるが、北側は巴ヶ丘自然公園となり、傾斜がよりきつくなる東側は杉林となっている。

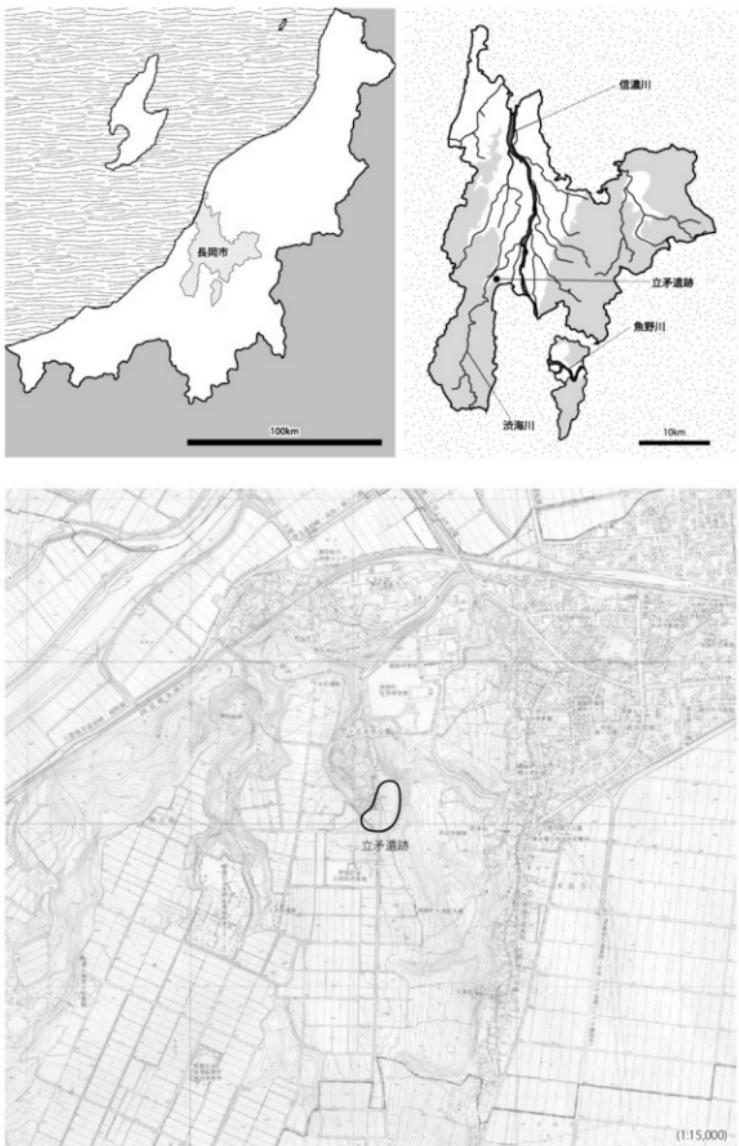
来迎寺を含む越路地域（旧三島郡越路町域）は、東頸城丘陵の北部、あるいは越後平野の南端に位置する。東は信濃川が、西は渋海川が丘陵地帯から越後平野に流入する地域であり、更新世・完新世の河岸段丘群が分布している。越路地域の段丘の基盤は更新統の魚沼層群である（魚沼丘陵団体研究グループ 1983）。信濃川左岸の段丘面、いわゆる越路原段丘は越路原Ⅰ面（13～15万年前）、片貝面（10万年前）、越路原Ⅲ面（5.5万年前）に区分されている〔渡辺 2007〕。このうち立矛遺跡は片貝面に立地する。片貝・真人背斜軸から小千谷向斜軸にかけて段丘面の傾斜は顕著で、片貝面は東側に最大 30° 傾斜している〔渡辺 1997〕。

河岸段丘ではしばしば湧水がみられる。この中には沢を形成し、長い時間をかけて河岸段丘を開拓している姿も確認できる。魚沼層群の砂礫層は 16～32 mm の小礫が堅く締まっており〔加藤ほか 1993〕、それは自然の浄水器となり良質な水を提供している。例えば、本遺跡の約 0.5km 北、朝日神社の脇に湧く清水は「宝水」とも呼ばれ、江戸時代から今日に至るまで日本酒の仕込み水に使われ続けている。越路原段丘の遺跡の多くは段丘縁辺部や沢の近くに立地しており、このことは水資源が選地の条件であったことを物語っている。巴ヶ丘自然公園の整備などによってその姿は変わっているものの、立矛遺跡の西側にも沢が入っており、これが遺跡形成に一定の役割を担ったことは想像に難くない。

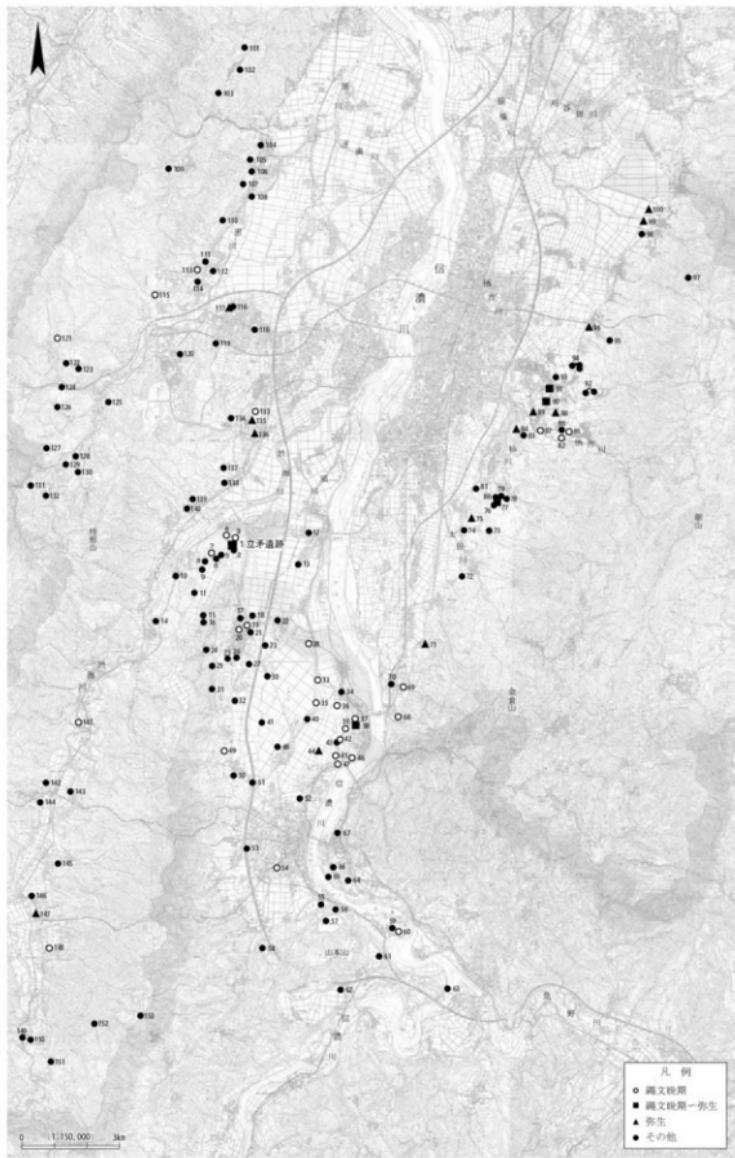
2 周辺の遺跡（第3図）

丘陵沿いに形成された段丘や台地上に遺跡が多く位置する傾向が読み取れる。信濃川を中心とする大小の河川の氾濫を避けての立地であろうか。時期別には縄文時代前期は少なく、中期になると激増する。後期にはやや数を減らし、晩期になるとその半数以下となる。弥生時代前期が主体となる遺跡はなく、中期・後期は少ないとほぼ同数の遺跡数を数える。以下では本遺跡の主体となる縄文時代晩期から弥生時代の遺跡を中心に概観したい。

越路地域の遺跡 本遺跡のすぐ南には立矛南遺跡（2）、北には朝日遺跡（3）が位置する。立矛南遺跡は縄文時代中期前葉の小規模遺跡である。平成 18 年（2006）の発掘調査では土坑やピットが検出された〔長岡市教委 2007〕。朝日遺跡は縄文時代晩期中葉を主体とする集落跡であり、昭和 36 年（1961）の発掘調査では配石構造やピットが検出されている〔越路町教委 1965〕。晩期中葉の土器群は、新潟県中越地方の土器様相を良好に示す資料として、「朝日式」と型式設定された研究史をもっている。本遺跡の南西、「權ケ沢」と呼ばれる開析谷に沿って、右岸に上並松遺跡（5）、左岸に朝日原遺跡（7）が位置する。上並松遺跡は縄文時代中期後葉から後期前葉を主体とする集落跡で、昭和 42 年（1967）の発掘調査では石組炉や焼土、配石などが検出された〔越路町教委 1970〕。その報文の中で「並松 E 群」と呼称された一群は、後期初頭の土器研究の指標となっている。朝日原遺跡は縄文時代中期前葉と晩期中葉の小規模遺跡である。平成 15 年（2003）の発掘調査ではピットが 28 基検出されている〔越路町教委 2004〕。



第2図 遺跡の位置



第1表 周辺の遺跡(縄文時代前期~弥生時代)(1)

No.	遺跡名	主な時期	文献
1 立手	縄文後期~古墳後期	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
2 立手面	縄文中期後葉	「長野市歴史文化財評議会報告書 第二回調査」 1987、長野市長野市文化委員会	
3 破口	縄文中期中葉	「昭和町立 史料評議会報告書 第一回調査」 1983、昭和町教育委員会	
4 下室井	縄文後期~地盤	「昭和町立 史料評議会報告書 第二回調査」 1979、昭和町教育委員会	
5 上室井	縄文中後葉~後期前期	「昭和町立 史料評議会報告書 第一回調査」 1979、昭和町教育委員会	
6 中山	縄文中期後葉~後期前期	「中山市歴史文化財評議会報告書」 1982、中山市教育委員会	
7 破口原	縄文中期後葉~後期中期	「昭和町立 史料評議会報告書 第二回調査」 2004、昭和町、鳥取県羽根町教育委員会	
8 鹿の頭丸	縄文	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
9 鹿の頭丘	縄文	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
10 千石原	縄文中~後期?	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
11 鶴見原C	縄文	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
12 仁多里遺跡下	縄文中期後葉	「昭和町立 史料編」 第80・81・82・83号 1990、昭和町	
13 多賀原塗	縄文中期中葉~後期前期	「昭和町立 史料評議会報告書 第一回調査」 1981、昭和町教育委員会 「長野市歴史文化財評議会報告書 第一回調査」 2011、長野市長野市文化委員会	
14 成合	縄文中期後半	「昭和町立 史料評議会報告書 第二回調査」 1982、昭和町教育委員会	
15 関原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書 第一回調査」 2004、昭和町教育委員会	
16 深水郷	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1989、小谷市教育委員会	
17 尾寺舟	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
18 田原	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
19 町西	縄文中期	「村田実記」 昭和20年1月号に「小谷町立調査会による『古代』第21-22号墓」 1966、早稲田大学考古学部	
20 中寺塚	縄文中期	「御器所藏文化財評議会報告書」に名	
21 面原	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
22 沼原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
23 今井原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
24 仁ヶ原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
25 鶴山	縄文の始	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
26 大曾塚	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
27 田代原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
28 田代原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
29 1.曲	縄文の始	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
30 田原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
31 佐野原	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
32 関上	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
33 青池	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
34 三ツ塚	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
35 平原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
36 上野	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
37 望村	縄文~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書第4号」 宮城野・西浦・瀬戸・望村・石川西・瀬波」 1996、新潟県教育委員会・財(財)新潟県歴史文化財評議会監修	
38 二佐生	縄文中期~中~後期、弥生	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会 「新潟県歴史文化財評議会報告書第4号」 企画連携・二佐生(瀬戸・二佐生)・瀬波」 1999、新潟県教育委員会・財(財)新潟県歴史文化財評議会監修	
39 百草原C	縄文中期~中~後期~地盤	「長野県歴史文化財評議会報告書第4号」 宮城野・西浦・瀬戸・瀬波・百草原C」 1996、新潟県教育委員会・財(財)新潟県歴史文化財評議会監修	
40 開木本	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
41 小谷原塚N.1	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
42 脱人A	縄文~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
43 朝日原	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
44 鶴之北	縄文の始、後生	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
45 金原	縄文中期~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
46 百留D	縄文~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
47 百留東	縄文~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書第6号」 宮城野・西浦・瀬戸・百留D・瀬波」 1996、新潟県教育委員会・財(財)新潟県歴史文化財評議会監修	
48 南原	縄文中期~中~後葉	「長野市立科学博物館研究報告第八号」 後世史の部「中道遺跡」 1986、長野市立科学博物館	
49 旗塚六	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
50 旗野	縄文中期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
51 城之壁	縄文中期後葉~後期前期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
52 旗金原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
53 両原原	縄文中期~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
54 上山原	縄文~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
55 鶴石口・山原	縄文中期~後葉	「鶴石口・山原の小谷遺跡・中道遺跡」 1989、小谷市教育委員会	
56 中道原	縄文中期	「鶴石口の遺跡・中道遺跡」 1989、小谷市教育委員会	
57 中道	縄文~後期	「鶴石口の山遺跡・中道遺跡」 1989、小谷市教育委員会	
58 四ヶ子山	縄文中期後葉	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
59 矢原	縄文中期~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
60 大坂神	縄文中期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
61 上・中原	縄文中期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
62 鶴石平	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
63 西原	縄文中期~後期	「新潟県歴史文化財評議会報告書」に名	
64 大瀬原	縄文中期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
65 元牛子	縄文中期~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	
66 上原里	縄文中期~後期	「小谷市歴史文化財評議会報告書」 1990、小谷市教育委員会	

第2表 周辺の遺跡(縄文時代前期~弥生時代)(2)

No.	遺跡名	主な時期	文献
67 美原	縄文中期	「小平山文化財報告書第4号」、内建部試研分室調査報告書第1号、1990 小平山市教育委員会	
68 千葉山	縄文中期~後期(前田の山)	「長岡市立科学博物館研究報告第4号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
69 中原	縄文後期	「長岡市立科学博物館研究報告第5号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
70 外新田	縄文後期から~後世前期	「外新田遺跡」、内建部試研分室調査報告書第1号、1966 長岡市立科学博物館	
71 阿賀山	後半前期	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
72 山本	縄文	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
73 入山	縄文中期後葉~中世中期	「長岡市立科学博物館研究報告第6号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
74 長良野	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第7号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
75 猪俣	縄文中期~後期	「長岡市立科学博物館研究報告第8号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
76 小山田	縄文中期	「長岡市立科学博物館研究報告第9号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市教育委員会	
77 金曾	縄文中期後葉~後期、後生	「長岡市立科学博物館研究報告第10号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
78 山下	縄文中期後葉~後期初期	「長岡市立科学博物館研究報告第11号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市教育委員会	
79 金幡	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第12号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
80 青木	縄文中期	「長岡市立科学博物館研究報告第13号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市教育委員会	
81 下条山	縄文~後期	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
82 中原	縄文~後期	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
83 行坂	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第14号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
84 銀山町	後生前期	「長岡市立科学博物館研究報告第15号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
85 大須野	縄文中期(前田の山)	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
86 森吉	縄文中期後葉	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
87 二賀駅	縄文前期~中期	「二賀駅遺跡-1(1号施設)」、1998 長岡市教育委員会 「二賀駅遺跡-2(2号施設)」、1997 長岡市教育委員会	
88 須山	縄文中期後葉~後生後期	「長岡市立科学博物館研究報告第16号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
89 望月	後生~後期	「山川日記」長岡市立公民館附属小学校(生田山石碑)出土考古学小集、昭和49年 老舗古文書研究会	
90 善賀神社裏	縄文中期後葉~後生中期初期	「長岡市立科学博物館研究報告第17号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
91 戸内二門	縄文中期後葉~後生中期初期	「長岡市立科学博物館研究報告第18号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
92 百草原	縄文中期後葉	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
93 西ノ貝	縄文中期後葉~後期中期	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
94 東ノ貝	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第19号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
95 家原	縄文中期後葉	「長岡市史 資料編」、考古文1992 長岡市	
96 朝村	後生後期	「長岡市立科学博物館研究報告第20号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
97 木戸	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第21号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
98 犬伏	縄文中期	「長岡市立科学博物館研究報告第22号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
99 犀山	後生後期後半~後期前半	「中標津・丘北古墳羣」、先史時代後期及び古墳時代の遺跡、「三条考古学研究会」昭和45年	
100 鳴山	後生~後世中期	「鳴山の遺跡」、1997 長岡市教育委員会	
101 美原	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
102 門ノ沢	縄文中期	「鳥取市立教育委員会調査報告書第1号」、『門の古遺跡』、1965 「鳥取市教育委員会」	
103 千代	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
104 猫屋下福塚	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
105 千心原	縄文中期	「鳥取市立教育委員会調査報告書第2号」、但立遺跡(第1次)「報告書資料解説(-) 千心原遺跡(第二次)」、千心原教育委員会	
106 百山	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
107 金子入山	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
108 熊立	縄文後期	「鳥取市立教育委員会調査報告書第3号」、但立遺跡」、1968 「鳥取市教育委員会」 「鳥取市立教育委員会調査報告書第4号」、但立遺跡(第1次)「報告書資料解説(-) 千心原遺跡(第2次)」、千心原教育委員会	
109 丸山内	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
110 朝日山	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
111 里の	縄文中期	「新潟県麻績文化財伝記藏地カード」に記載	
112 上岡	縄文中期	「鳥取市立教育委員会調査報告書第5号」、上岡遺跡」、1960 「鳥取市教育委員会」	
113 吉岡	縄文中期	「鳥取市立教育委員会調査報告書第6号」、吉岡遺跡」、1968 「鳥取市教育委員会」	
114 大河内	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第1号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
115 岩野	縄文中期~後期中期	「長岡市立科学博物館研究報告第2号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
116 五照	縄文中期後葉~中期中期	「長岡市立科学博物館研究報告第3号」、五照遺跡、「二輪遺跡・六石・門木遺跡」、「黄葉遺跡」、1991 長岡市教育委員会	
117 三輪	縄文中期後葉~後生中期初期	「長岡市立科学博物館研究報告第4号」、三輪遺跡、「高瀬遺跡・牛平遺跡」、「楓葉遺跡」、1991 長岡市教育委員会	
118 和室	縄文中期後葉~中期中期	「長岡市立科学博物館研究報告第5号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
119 馬糞~二十番地	縄文中期~後期中期	「十輪遺跡調査報告書」、1970 長岡市教育委員会 「前浜馬糞山遺跡(馬糞)・十輪遺跡」、「調査報告書第1号」、1973 長岡市教育委員会 「馬糞山遺跡」、「十輪遺跡」、「前浜馬糞山遺跡」、「調査報告書第2号」、1974 長岡市教育委員会 「馬糞山遺跡」、「十輪遺跡」、「鷹巣山」、「調査報告書第3号」、1975 長岡市教育委員会	
120 城印	縄文中期後葉~中期中期	「長岡市立科学博物館研究報告第6号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
121 金坂	縄文中期	「長岡市立科学博物館研究報告第7号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
122 大平	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第8号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
123 開癩地	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第9号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館	
124 小平ラバ	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第10号」、1966 大平小学校	
125 旗ヶ山	縄文中期後葉	「長岡市立科学博物館研究報告第11号」、1966 大平小学校	
126 清瀬	縄文中期~後期	「長岡市立科学博物館研究報告書 金城跡解説・キサザン遺跡・百合塚遺跡・旗ヶ山遺跡」、1968 長岡市教育委員会	
127 館沢	縄文後期後半	「蓬萊の郷土(館沢)」、1966 大塙小学校 「長岡市立科学博物館研究報告第12号」、先史時代・長岡の遺跡」、1966 長岡市立科学博物館 「小平(20番地の丘)」、1976 学生社	

第3表 周辺の遺跡(縄文時代前期-弥生時代)(3)

No.	遺跡名	主な時期	文献
126	平山	縄文後期中期	【長岡市出土】(6件) 1966 大塚中学校 【長岡市立科学博物館研究調査報告第8集 先史時代と長岡の遺跡】1966 長岡市立科学博物館
129	カツヨ	縄文後期中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第五回遺跡調査(カツヨ)】(1件) 1969 長岡市教育委員会
130	牛林	縄文後期中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第六回遺跡調査(牛林)】(1件) 1969 長岡市教育委員会
131	花林	縄文後期中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第七回遺跡調査(花林)】(1件) 1969 長岡市立科学博物館
132	花北	縄文後期中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第八回遺跡調査(花北)】(1件) 1969 長岡市教育委員会
133	藤橋	縄文前期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第九回遺跡調査(藤橋)】(1件) 1971 長岡市立科学博物館等発掘調査委員会 【長岡市立科学博物館研究調査報告 第十回遺跡調査(藤橋)】(1件) 1977 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 【藤橋遺跡-史跡形態調査(第1回-第10回)】(1件) 1961 長岡市教育委員会 【藤橋遺跡-「人」の歴史(古くから)】(1件) 1991 長岡市教育委員会
134	佐山	縄文中期後期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第一回遺跡(佐山)】(1件) 1966 長岡市立科学博物館
135	京足	佐山中期後期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第二回遺跡(京足)】(1件) 1977 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会
136	日置川遺跡群	佐山中期後期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第三回遺跡(日置川)】(1件) 1977 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会
137	津子打場	縄文前期～中期前半～中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第四回遺跡(津子打場)】(1件) 1966 長岡市教育委員会
138	若狭里	縄文中期後期～後期中期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第五回遺跡(若狭里)】(1件) 1981 長岡市教育委員会
139	猪山	縄文中期後期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第六回遺跡】(1件) 1987 長岡市教育委員会
140	山手	縄文中期後期中期後期	【長岡市立科学博物館研究調査報告 第七回遺跡】(1件) 1996 長岡市立科学博物館
141	小原	縄文～後期	【経済考古 資料編】 経済古代・中世 1999 綾瀬町
142	押田	縄文後期	新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる
143	ハマガタ	縄文中期	新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる
144	田西	縄文後期	新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる
145	法坂	縄文中期後期	新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる
146	新町の原	縄文中期後期～後期前半	【長岡市立科学博物館研究調査報告 新町の原遺跡】2009 新潟県長岡市教育委員会
147	木上	佐山中期後半	【新潟県立博物館・古墳・埋蔵文化財調査研究報告第5集 木上】(1件) 2004 新潟県立博物館等発掘調査委員会
148	足守寺の原	縄文中期後期	新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監視センターによる
149	木の原	縄文中期	新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる
150	鶴の原	縄文中期後期	新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる
151	納之島	縄文中期	新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる
152	赤石	縄文中期	新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる 新潟県埋蔵文化財行政監视センターによる

洪海川左岸の遺跡 一方、洪海川の左岸には藤橋遺跡(133)、尾立遺跡(135)、旧富岡農学校跡遺跡(136)などが位置する。藤橋遺跡は縄文時代後期の集落跡で、新潟県において竪穴住居ではなく掘立柱建物が主体となる集落構成が初めて確認された晩期集落として注目される〔長岡市教委 1991 ほか〕。尾立遺跡は弥生時代中期初頭を主体とし、掘立柱建物や配石造構などが検出されている〔長岡市教委 1977〕。旧富岡農学校遺跡では弥生時代の櫛目土器や管玉などが採集されているが、昭和 51 年(1961)の発掘調査では構造・遺物ともに確認できなかった〔長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977〕。

信濃川左岸の遺跡 本遺跡から 5 km 以上離れた遺跡に目を向けると、南西に 6.5 km 離れた位置に堂付遺跡(37)、三仏生遺跡(38)がある。それぞれ平成 7 年(1995)、平成 10 年(1998)に発掘調査されており、堂付遺跡からは縄文時代早期～晩期の土器が出土し〔新潟県教委 1996〕、三仏生遺跡からは縄文・弥生時代全般の遺物が出土している〔新潟県教委 1999〕。南西に約 13 km 離れた地点には水上遺跡(147)がある。水上遺跡は弥生中期後半の栗式とともに、県内で類例の少ない石包丁が出土したことによって注目される。石包丁は使用痕分析の結果、イネ科植物の切断に使用されたと推測されている〔小国町教委 2004〕。

信濃川右岸の遺跡 北に約 7 km 離れた地点には三ノ輪遺跡(117)がある。ここでは弥生時代中期の再葬墓が検出されている〔長岡市教委 1991〕。再葬墓からは 4 個体の埋甕が出土し、特に 3 号埋甕は阿賀野市六野瀬遺跡〔安田町教委 1992〕や同市猫山遺跡〔京ヶ瀬村教委 2003〕の再葬墓から出土した埋甕と共に通るモチーフが描かれており、同時期の再葬墓として興味深い。北東に約 16 km 離れた地点には原山遺跡(99)と横山遺跡(100)がある。原山遺跡は発掘調査が行われていないが、弥生中期後半～後期前半の土器が採集されている。丘陵の崖面で構造遺構の断面が確認されており、環濠あるいは方形周溝墓の存在が指摘されている〔田中 1985〕。横山遺跡は弥生時代中期～終末期の環濠集落である。濠の外側からは方形周溝墓が検出された。初痕の付いた土器が出土したことから稲作の可能性が指摘され、また、出土した鉄片から鉄器の使用が想定されている〔長岡市教委 1987〕。

第III章 調査の方法と経過

1 発掘調査の方法と経過

発掘調査の方法 調査にあたり、調査区の長軸方向（東西）に沿って 10m×10m の大グリッド及び 2 m × 2 m の小グリッドを設定した（図版 1）。各グリッドの呼称については、北東端を原点とし、大グリッドは北から南へ向かってアルファベットの A～D を、東から西へ向かってアラビア数字の 1～10 を振り当た。小グリッドについては、やはり北東端から南へ 1～5、一段西に降りてやはり北から南へ 6～10 などと、25までを振った。また、便宜的に調査区の中央を分断する道路から東側を東区、西側を西区と呼称したが、この呼称は整理作業や本報告書においても継続して用いた。

表土剥ぎはバックホーによるすき剥ぎで行った。調査区西側に隣接する市有地を廃土置き場としたが、ここまで距離が最大 100m と長いため、キャリアダンプを併用した。

遺物包含層及び遺構覆土は、ジョレンや移植ゴテ、ネジリガマなどを用いた人力作業によって掘削した。掘削土は調査区を東西方向に縱断するように設置したベルトコンベアによって運搬した。

遺物の出土位置は、原則として光波測量によって記録した。ただし、掘削に際して残念ながら原位置が不明となった遺物もあり、これについてはグリッド単位や遺構単位で取り上げた。遺構平面図も光波測量で作成し、一部を簡易やり方実測で補った。基本土層と各遺構の土層断面図も簡易やり方実測で記録した。この場合、実測図の縮尺は、1/10 を原則としたが、対象によって 1/5 や 1/20 とした。

記録写真の撮影は 2 名の調査員がそれぞれキヤノン Eos-Kiss シリーズを二台ずつ用い、モノクロフイルムとデジタルデータ（JPEG 形式）で記録した。航空写真については、ラジコンヘリに一眼レフカメラ・デジタル一眼レフカメラを搭載し、リバーサルフィルムとデジタルデータ（JPEG 形式）で撮影した。

発掘調査の経過 平成 23 年 5 月 9 日より、表土剥ぎ作業を開始した。確認調査の結果を踏まえて、堆積の厚い調査区東側より着手し、漸次西側へ進めた。表土剥ぎ作業は 11 日まで 3 日間で行った。5 月 12 日に安全教育を兼ねた事前説明会を実施した。また、この日から機材の搬入を開始した。14 日までにベルトコンベア・休憩小屋・事務所・機材小屋等を搬入し、車止めや工事看板等を設置した。またこの期間にグリッド杭の打設を行った。

作業員、調査補助員を動員しての調査は翌週の 5 月 16 日から開始した。遺物・遺構密度の低い西区から作業を開始することとし、作業員数 30 名体制で包含層の掘削、遺物の検出と取り上げ、遺構確認等の作業を行った。西区西端では S X 1 を検出したが、比較的規模の大きなものと予想されたため、この遺構については他の遺構に先行して掘削を開始した。西区では、S X 1 と一部の土坑以外にはピットが散在するのみで、北東部以外では遺物の出土量も少なく、このため調査は比較的スムーズに進捗した。西区の遺構確認作業はほぼ 19 日までに終了した。一方、東区の包含層掘削と遺構確認作業は、5 月 18 日以降本格化した。こちらは包含層が厚く、同層中からの出土遺物も多かったため、27 日までを要した。この段階で、東区では集石遺構、溝状遺構、ピット、そして個体土器資料などを確認している。

5 月 31 日から遺構掘削を開始した。当初、平面プランからは倒木痕が多く、遺構が少ないと思われた。しかし、P 6・P 9 がしっかりと掘り方をもつ大形の柱穴であることが判明し、さらに P 16 など、根固め石を伴う柱穴も検出されたため、C・D 3・4 グリッド付近に掘立柱建物跡があることが推測された。しかし、これら遺構の配列から把握される掘立柱建物（S B 1・S B 2）は、柱間約 7 m、桁行 1 間×梁行

1間の建物であった。したがって中间に位置する柱穴が存在すると想定し、その検出作業を繰り返し実施した。また、D 6 グリッドで検出した P15 は、P16 などと同じように根固め石を伴う柱穴だが、これと対応する構造を検出できずにいた。これら柱穴の検出作業に努めたこと、そして SD 7 が深く掘り込まれた溝状構造であったことなどによって、調査終盤に差し掛かって作業の進捗が鈍ったが、6月7日には発掘削をほぼ完了することができた。6月8日に全体精査を行い、午後から航空写真撮影を実施した。翌9日には、掘立柱建物跡の柱穴を求めて、バックホーを使用して再度検出作業を行ったが、やはり中间に位置する柱穴を見つけることができなかった。6月10日から機材の撤去、搬出と共に埋め戻し作業を開始。6月13日までに全ての作業が完了した。そして翌14日、開発担当課である長岡市地域建設課に現場を引き渡した。

2 整理作業の経過

一部の遺物の洗浄は、雨天で現場作業を休止した5月30日に現場休憩所で行ったが、これ以外、大半の遺物洗浄は、発掘調査終了後、受託事業者である株式会社シン技術コンサルの整理室で行った。この作業に要した期間は6月13日から28日までであった。注記作業は2名体制で行った。作業期間は6月20日から7月1日までである。この期間に記録写真や図面等の整理も行った。遺物の注記が終了した7月1日以降、土器の接合・分類作業を開始し、4日からは土器復元作業及び補強作業を開始した。そして14日から遺物の基礎データの入力作業を行った。

遺物の図化作業は7月24日から開始した。土器に関しては、拓描図・写真実測図とも手取りの拓描図、図面を作成し、それをスキャナで読み込んで、パソコン上で加工し、デジタルデータとして仕上げた。図化作業は9月14日に終了した。この間、土器観察表の作成を並行して行い、また、土器の写真撮影と、デジタルデータの加工、そして編集作業を行った。土器実測図の編集作業は9月14日から16日までの3日間で行った。石器に関しては、長岡市教育委員会において実測・トレース・事実記載・観察表の作成まで行った。石器実測図の作成に際しては実測用写真を活用し、デジタルトレースとして仕上げた。一連の作業は10月13日から31日までの期間を行った。構造図の作成は7月7日から開始した。構造図・遺物分布図は株式会社信濃技術が原図を作成し、それを調査員が修正・加工して仕上げた。個別構造図・遺物分布図とも9月5日にはほぼ完了し、9月15日までに構造図版を作成した。構造観察表については、9月7日、8日の両日で作成した。11月からは全体の修正・調整作業を行い、11日に印刷所へ入稿した。

第4表 作業工程

	5	6	7	8	9	10	11	12
発 掘 調 査	■	■	■					
遺 物 洗 浄								
注 記								
記 録 写 真								
土 器 接 合								
土 器 復 元								
遺 物 分 布								
個 別 構 造								
遺 物 分 布 図								
個 別 構 造 図								
遺 物 分 布 表								
個 別 構 造 表								
遺 物 分 布 表 作 成								
個 別 構 造 表 作 成								
遺 物 分 布 表 改 正								
個 別 構 造 表 改 正								
個 別 構 造 表 印 刷								
個 別 構 造 表 編 集								
算 算								

第IV章 調査の成果

1 検出遺構と出土遺物の概要

今回、発掘調査した面積は約 1,760 m² であった（東区：950 m² 西区 810 m²）。この範囲から、63 基の遺構が検出され、1,937 点の遺物が出土した。遺物、遺構とも東区の検出量が西区よりも多かった。

発掘調査で確認し整理作業を通して認定した遺構の種別数は、それぞれ掘立柱建物跡 3 棟（これに属する柱穴 11 基）、集石遺構 1 基、土坑 5 基、溝状遺構 4 条、ピット（柱穴、性格不明のもの含む）41 基、性格不明遺構 2 基を数えた。

出土遺物では多くを土器が占め、土器 1,664 点、石器 252 点であった。その内訳は、繩文土器 278 点、弥生土器 137 点、縄文もしくは弥生土器 1,244 点、須恵器 3 点、土師質土器 2 点である。土器は便宜的に時期ごとの分類を行った。縄文時代前期を I 群、中期を II 群、後期を III 群、晩期を IV 群、弥生時代前期を V 群、中期を VI 群、後期を VII 群、時期不明土器を VIII 群とした。数量は I 群 4 点、II 群 90 点、II～III 群 15 点、III 群 6 点、IV 群 160 点、I～IV 群 4 点、V～VII 群 7 点、VI 群 58 点、IV～VI 群 1 点、VI～VII 群 27 点、VII 群 45 点、VIII 群 1,218 点を数える。石器は器種ごとに分類を行った。内訳は石鏃 3 点（うち未製品 1 点）、石錐 3 点、磨製石斧 1 点、不定形石器 6 点、二次加工のある剥片 8 点、剥片 184 点、磨石類 30 点、石皿 2 点、砥石 1 点、石核 14 点である。

2 基本土層（図版 1）

調査区の東壁と西壁の合計 4 節所（図版 1：基本土層①～④）で土層の堆積状況を記録した。この中では基本土層①において典型的な土層の堆積状況が認められたため、これを中心に本遺跡の堆積状況について述べる。

I 層 黒褐色土層 (10YR3/1) 粘性は〈2〉、締まりは〈2〉である。表土。ローム粒、炭化物を微量、穢を少量含む。遺物の出土は少数である。

I' 層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 粘性は〈2〉、締まりは〈3〉。耕作土。ローム粒、炭化物、穢を微量含む。東区の 4 ライン以東のみで見られる。B 2～4 グリッド付近ではガチガチに硬い部分も認められた。ごく少数の遺物が出土する。

II 層 黒褐色土層 (10YR3/1) 粘性は〈2〉、締まりは〈2〉である。縄文時代及び弥生時代の遺物包含層である。ローム粒、炭化物を微量含む。調査区に全般的に堆積していたが西区の西側 8～9 ラインでは認められなかった。

III 層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 粘性は〈2〉、締まりは〈4〉。漸移層である。ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。東区の 1～4 ラインで見られた。

IV 層 浅褐色土層 (10YR5/6) 粘性は〈2〉、締まりは〈4〉。風化火山灰土層である。

遺物包含層である II 層は東区の東端、特に等高線の込み合う B・C 1・2 グリッドで厚い堆積が認められた。他方で、上述したように西区西側では観察することができなかつた。この 8・9 ラインでは、III 層（漸移層）も残っておらず、I 層直下で IV 層が確認される。このことから、この付近では II 層及び III 層が既に削平されてしまったものと考えられる。また、農道の東側に沿って I・II 層に相当する層が非常に強く転圧されたような範囲が帶状に認められた。農道の敷設に伴い影響を蒙ったものと考えられる。

3 検出遺構と遺構出土遺物

(1) 検出遺構の分布 (図版1)

調査区の中では、西区よりも東区で多くの遺構が検出された。東区の遺構は種別も多様であった。掘立柱建物跡、溝状遺構、集石遺構は全て東区で検出している。柱穴と推測される、根固め石が伴うピットも、やはり東区のみから発見されている。他方、西区からは性格不明遺構としたSX1が発見され、3基中2基の土坑も、西区で見つかっている。溝状遺構は東区のなかでも北に偏る傾向が顕著である。ピットは全体的に分布するが、そのなかでも粗密がある。具体的には、東区の3～6ラインに集中し、7ライン付近では稀で、西区の8・9ライン付近で再び多くなる傾向が認められた。

(2) 掘立柱建物跡 (図版2～6)

S B 1 (図版2・4・5) C・D4・5グリッドで発見された掘立柱建物跡である。4基の柱穴 (P6、P11b、P25a、P16b) だけが発見されており、その間隔も約7mと大きすぎる。しかしながら、各ピットは明らかに柱穴であること、そして4基の柱穴が四角形に配列することから、掘立柱建物跡と認定した。周囲の遺構検出作業を徹底的に行ったにもかかわらず、中間に位置する柱穴を発見することができなかつた。構造は1間×1間で、桁行(北側)7.11m、梁行(東側)6.95m、長軸方向はN~85°-Eであった。

P6は、SB1の北西隅にあたる柱穴である。南側をP9、上部をSK19に切られる。平面形態は梢円形で、長径は残存値で48cm、断面形態は箱状を呈し、底面までの深さは残存値で92cmであった。

遺物は土器16点、石器1点が出土し、うち土器2点、石器1点を図化した(図版17・22)。また、P6・9の一括遺物として土器4点、石器1点が出土している。1・2はP6から出土した一括遺物である。胎土や色調などから同一個体の可能性がある。2点とも条痕文が施されており、IV群に分類した。196は石錐である。安山岩製で、基部および実測図正面に素材面を残していることから、角柱状の剥片を素材して製作されたと推測される。

P11bは、SB1の南西隅に当たる柱穴である。南側をP11aに切られている。また、土層断面に現れた①層部分も新しい土坑(SK26)であり、これにも切られている。平面形態は梢円形で、長径は残存値で42cm、断面形態は箱状で、SK26下から底面までの深さは83cmであった。

遺物は土器が4点出土した。2点を図化した(図版17)。ただしP11の一括遺物としては、土器38点、石器4点が出土しており、その所属がP11aなのかP11bなのかは不明である。3はP11から出土した一括遺物である。条痕文が施されており、IV群に分類した。4はP11bの①層から出土した。半截竹筒で描かれたと推定される平行沈線が横位に巡る。

P16bは、SB1の北東隅に当たる柱穴である。南端をP16bに切られている。平面形態は円形で、長径は残存値で63cm、断面形態はU字状で、確認面から底面までの深さは126cmであった。覆土のうち①層が柱底と考えられる。

遺物は土器が3点出土した。2点を図化した(図版17)。5はP16bの②層から出土した。ハケによって整形されている。6はP16bとP16cから出土した一括遺物が接合したものである。底部からの立ち上がりの角度が浅いため、浅鉢とした。外面が黒みがあり、やや光沢を帯びるのが特徴的である。

P25aは、SB1南東隅の柱穴である。南側半分は調査区外にあり、東側はP25bに切られる。平面形態は梢円形、長径は残存値で30cm、断面形態はU字状で、確認面から底面までの深さは107cmである。

遺物は出土していない。

S B 2 (図版3・4・5) S B 1 と同じく C・D 4・5 グリッドで発見された掘立柱建物跡である。やはり 4 基の柱穴からなり、各柱穴は S B 1 の柱穴の南側に隣接して掘削され、それらを切っている。以上のことから、S B 1 を立て替えたものと推測される。構造は 1 間 × 1 間で、桁行 (北側) 7.41m、梁間 (東側) 6.46m、長軸方向は N-81° -E であった。

P 9 は、S B 2 の北西隅に当たる柱穴である。S B 1 の P 6 を切り、S K 19 に切られている。平面形態は略方形を呈し、長辺は 108cm、断面形態は箱状で、確認面から底面までの深さは残存値で 120cm を測った。①層が柱底に相当する部分と推定され、これに当たる底面には硬化面が検出された。

遺物は土器が 3 点出土しており、そのうち 1 点を図化した (図版 17)。一括遺物は既述のとおりである。7 は P 9 の①層から出土した。条痕文が施される。IV群に分類した。

P 11 a は S B 2 の南西隅に当たる柱穴である。P 11 b を切っている。P 11 b でも述べたように、土層断面で確認された①層部分はより新しい土坑 (S K 26) で、これにも切られている。P 11 a の平面形態は略方形であり、長辺は 67cm、断面形態は箱状で、S K 26 下から底面までの深さは 96cm であった。

遺物は土器が 5 点出土した。一括遺物は既述のとおりである。

P 16 c は S B 2 の北東隅に当たる柱穴である。P 16 b をわずかに切っている。平面形態は略方形で、長辺は 52cm、断面形態は U 字状で、確認面から底面までの深さは 69cm であった。また、P 16 c からは根固め石が検出されており、柱穴の中心を囲むように 11 点の礫が出土した。

遺物は土器 3 点、剥片 1 点が出土し、そのうち土器 1 点を図化した (図版 17)。8 は P 16 c の①層から出土した。口縁部が肥厚し、その下に結節繩文が施される。また、破片の下部には補修痕も観察できる。IV群に分類した。

P 25 b は S B 2 の南東隅に当たる柱穴である。南側の半分以上が調査区外に存在するものと推測される。P 25 a を切っている。平面形態は不明瞭ながらも梢円形をなすものと考えられ、長径は残存値で 40cm、断面形態はやや不整形な U 字状で、土層断面で確認された深さは 60cm である。

遺物は出土していない。

S B 3 (図版3・4) D 4 グリッドで認定されたもので、3 基の柱穴 (P 23-P 17 b-P 13) の配列のみが発見されている。他の柱穴は調査区外にあると推測される。P 23 と P 17 b までの長さは 3.55m、P 17 b と P 13 までは 5.13m を測り、合計 8.68m である。この配列の方向は N-69° -E である。

P 13 は配列の東側で発見された柱穴である。P 24 に切られている。平面形態は梢円形で、長径 67cm、断面形態は階段状で、確認面から底面までの深さは 23cm であった。残念ながら土層断面を観察することができなかつた。

遺物は出土していない。

P 17 b は配列の中央に当たる柱穴である。隣接して P 17 a が検出されたが、両者の切り合い関係は観察できなかつた。平面形態は梢円形を呈し、長径は残存値で 40cm、断面形態は階段状をなし、確認面から底面までの深さは 35cm であった。

遺物は土器が 5 点出土しており、一括遺物は土器が 2 点出土した。そのうち 4 点を図化した (図版 17)。11 は①層、10 は②層から出土、9・12 が一括遺物である。9・10 は結節繩文が施され、10 は結節繩文 L R を横位に施している。12 は櫛描文が施される。9・10 は IV群、11・12 は VI群に分類した。

P 23 は配列の西側で発見された柱穴である。隣接する遺構を切っている。平面形態は長梢円形を呈し、長径は 88cm、断面形態は漏斗状を呈し確認面から底面までの深さは 65 cm であった。本遺構からは南側を

中心に根固め石が検出され、9点の礫が出土した。なお、柱痕は確認できなかった。

遺物は土器が1点出土した(図版17)。13は①層から出土した。口縁部直下の無文帯であり、破片の下部には胸部と区画する結節繩文が施される。IV群に分類した。

(3) 集石遺構

SS2(第4図・図版6) 西区C4-8グリッドのII層中で発見された、14個の礫から構成される集石遺構である。各礫は相互に比較的密集し、しばしば重なって、長軸65cm、短軸42cmの範囲に分布した。礫の出土レベルの差は5.8cmで、西側の礫が高く、東側が低い。これは周辺の地形と対応したものであり、当時の地表に平坦に配置されたものと推測される。

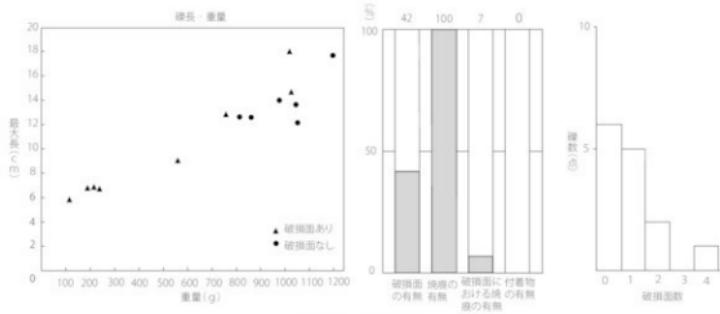
礫のサイズ(長径、重量)は、それぞれ5.9~18.0cm(平均11.6cm)で、125~1,182g(平均728g)までとやや偏差が大きいが、破損のない礫ははっきりとした偏りが認められ、長径12cm~18cmと重量800g~1,200gの間に6点すべてが収まる。また、出土した14個の礫すべてに焼痕が認められた。ただし、周辺から焼土や炭化物の検出はなく、この場所で燃焼された可能性は低いものと考えられる。

周辺からは土器破片が3点出土したが、いずれも極めて細かい破片であり、帰属する時代を明らかにできなかった。

(4) 土坑

SK5(図版7) B7-5グリッドで発見された不整形の土坑である。南西端に浅い部分があり、本来は別の遺構であった可能性が高いが、平面、断面の観察でも区別が困難であったため、単一のものとして扱った。したがって平面形態は、隅丸長方形と梢円形が重なったような形をしており、断面形態は一部に段を有し緩い弧状を呈する。長辺186cm、短辺131cm、確認面から底面までの深さは21cmであった。覆土はほぼ单一で、黒褐色土からなる。②層は漸移層に似た性状のもので、にぶい黄褐色土であった。

本遺構からは多くの遺物が出土した。本遺構確認以前のII層削削の段階で既に遺物の集中が認められた。遺物は土器20点、剥片1点が出土し、そのうち土器12点を図化した(図版17)。15・16・23・24は①層から出土し、14・17~22・25は一括遺物である。14・15・17は口縁部の肥厚が確認できる。18は結節繩文LRが横位に、19・20には条文痕が施される。21は破片の傾きなどから浅鉢の可能性がある。14~21は



第4図 SS2の礫

IV群に分類した。22は外面に条痕文が、内面にはハケによる調整がみられる。VI類に分類した。23・24は内面のハケ調整から、25は横位の沈線と連続刺突が施されることからV～VII群に分類した。

S K 8 (図版7) B 2・22・23 グリッドで発見された。SD21の脇で確認され、長軸方向も同遺構とはほぼ一致する。平面形態は、東西に長い長方形を呈し、東側の角はやや丸みを帯びる。長辺は200cm、短辺は108cmを測る。断面形態は浅い箱状を呈し、確認面から底面までの深さは26cmであった。底面はほぼ水平に掘り込まれ、大半の部分が平坦であったが、一部深く掘り込まれた部分がある。覆土は2層からなる。形態と規模から墓坑と推測されるが、骨片や副葬品の出土はなかった。

遺物は土器が1点出土した。その1点を掲載した(図版17)。26は一括遺物である。内・外面とも横位のハケ調整のようなものが確認できるが、磨耗が著しく明確に判別できない。

S K 26 (図版4) P11の土層断面図上で認定した遺構である。土層の堆積状況から、P11aとP11b両方が一度埋まつた後、この位置に新たに掘削された土坑と考えられる。平面形態は不明であり、土層断面で観察された底面までの深さは21cmである。

遺物は土器15点が出土した。2点を図化した(図版17)。27・28は①層から出土した。27は燃糸文が確認でき、IV群に分類した。28は4列並行の沈線が確認でき、浅鉢の可能性がある。

S K 40 (図版7) B 6・6グリッドで、東区隅で検出した。北側半分程度が調査区外に広がっている。平面形態は梢円形を呈し、長辺94cm、短辺は残存値で52cmであった。断面形態は箱状を呈し、底面のほぼ中央に小ピットが認められた。確認面から底面までの深さは124cm、小ピットの深さは12cmであった。覆土は15層が観察され、大半は黒色土と灰黄褐色土との互層であった(③層～⑨層)。遺構の形態や規模、底面中央に小ピットがある点など、陥し穴状遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

(5) 構造遺構

S D 3 (図版8・9) B・C 2～4グリッドで発見された構造遺構である。発掘調査時はS X 3と呼称した。調査区の外西側へ延びている。確認された範囲での長さは17.7mであった。遺構の残存状況の良い部分を平均した幅は27cm、確認面から底面までの深さは19cmであった。長軸方向はN=86°～Eで、等高線とほぼ直交し、わずかに蛇行しながら延びている。

他の構造遺構とは異なり、多量の礫が出土した。出土した礫の数は189点、それらの長径の平均は10.8cm、重量の平均は631gであった。焼痕のあるもの割合が66.7%と多かった。他方、タールなどの付着物などが認められるものは2.6%、5点に留まった。

遺物は土器15点、石器11点が出土した。そのうち2点を図化した(図版17・22)。29・30は2点とも一括遺物である。29は条痕文が施される。IV群に分類した。30は4条の並行沈線とその下に並行する波状沈線が確認でき、地文は縄文LRが横位に施される。妻の肩部と推定し、V～VII群に分類した。197は不定形石器に分類される。213は黒色ガラス質安山岩を素材とする。左側縁及び裏面の一部に原縁面が残されていることから、礫石器と推測される。恐らく石核からの転用であろう。二次加工はほぼ石器全周に及んでいるが、左側縁に対して顕著である。

S D 7 (図版10・11) B 1・2グリッドで確認された構造遺構である。調査区の北隅で発見されている。確認できた長さは、9.2m、幅の平均は125cm、断面形態は台形状にしっかりと成形され、底面も平坦であった。確認面から底面までの深さの平均は59cmであり、他の構造遺構と比べて明らかに深い。長軸方向はN

-89° -E で、付近の等高線に直交して延びる。

遺物は土器が 7 点が出土し、そのうち 5 点を図化した（図版 17）。35 は①層から、31・32・34 は②層から、33 は③層から出土した。31 は半隆起線が横位・縦位・斜位にみられ、新崎式に比定できる。32 は火焔式土器の袋状把手である。31・32 は II 群に分類した。33 は結節繩文 L R を横位に施している。口縁部にミガキが施されているのか、やや光沢を帶びている。IV 群に分類した。34 は壺の口縁部であり、8 本一單位の櫛描文が横位・波状に施される。35 は甕の口縁部であり、小松式系統の小波状口縁が確認できる。34・35 は VI 群に分類した。

SD 20（図版 10・11） B 1・2 グリッドで発見された溝状遺構である。SD 7 の南側でほぼ平行して確認された。確認できた長さは 12.9m、幅の平均は 28cm、確認面から底面までの深さの平均は 20cm であった。長軸方向は N-88° -E で、やはり SD 3・SD 7 とほぼ平行する。

遺物は土器 2 点、石器 1 点が出土した（図版 17・22）。36・37 は①層から出土した。36 は結節繩文 L R が横位に施される。IV 群に分類した。37 は条の細かな繩文 L R が横位に施される。天王山式と推定し、VII 群に分類した。

198 は安山岩を素材とした石皿である。実測図下半が欠損している。器面全体が被熱によって赤化しているが、割れ面は赤化していない。

SD 21（図版 1） B・C 2・3 グリッドで発見された溝状遺構である。SD 3 と SD 20 とに挟まれ、これに平行するように伸びている。ただし確認されたのは断続的でごく浅い掘り込みであった。現地での計測に堪えるものでなく、本書作成にあたっても個別図と觀察表の作成を省略した。

しかしながら、遺物は土器 3 点が出土した（図版 17）。38~40 は一括遺物である。38 は半截竹管による平行沈線が縦位に施される。II~III 群に分類した。39 は結節繩文 R L が横位に施される。IV 群に分類した。40 は口唇部に連続した押圧が施され、横位の平行沈線と波状沈線が巡る。天王山式と推定し、VII 群に分類した。

（6）その他ピット

P 10a（図版 12） 東区 D 4-21・22 グリッドで発見された。P 10 b を切る。平面形態は円形を呈し長径は 73cm、断面形態は半円状を呈し確認面から底面までの深さは 42cm であった。

遺物は土器 16 点、剥片 1 点が出土し、そのうち土器 4 点を図化した（図版 18）。41 は①層と②層から出土した破片が接合したもので、42 は①層から出土した。43・44 は一括遺物である。41 は口縁部が肥厚しており、繩文 R L が横位に施され、その下位に無文帯が作出される。42 はハケのようなもので外面が調整されている。41・42 は IV 群に分類した。43 は撚糸文が施されているが、磨耗が著しく文様が判然としない。44 は平行沈線が深く刻まれている。なお、P 10 b はごく浅く不明な部分が多いピットであるため、個別の記載を省略した。

P 15（図版 12） 東区 D 6-12・13 グリッドで発見された柱穴である。平面形態は梢円形を呈し長径 64cm、断面形態は U 字状を呈し、確認面から底面までの深さ 60cm を測った。東側を中心に根固め石が認められた。7 点の礫からなり、そのうちの 1 点は磨石の転用である。

その他の遺物は出土していない。

P 18（図版 12） 東区 D 4-2・3 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 51cm、断面形態は半円状で確認面から底面までの深さは 20cm であった。

遺物は土器 1 点が出土した。45 は一括遺物である（図版 18）。縄文 L R が横位に施されている。粗製土器の口縁部と推定し、IV群に分類した。

P22a（図版 12） 東区 B 4-15 グリッドで発見された。南側で P22 b を切る。平面形態は楕円形で長径 43cm、断面形態は箱状で確認面から底面までの深さは 40cm であった。柱穴であろう。なお、P22 b については不明な点が多く、報告を省略する。

遺物は土器 2 点が出土した。2 点を図化した（図版 18）。46 は②層から、47 は①層から出土した。46 は条の細かい縄文 L R が横位に施される。天王山式と推定し、VII群に分類した。47 は縄文が施されていると推定されるが、磨耗が著しく判然としない。その下位には無文帶が作出されている。

P27（図版 12） 東区 C 4-21 グリッドで発見されている。西側を方形の搅乱によって壊されている。平面形態は不整形となっており長軸は残存値で 45cm、断面形態は階段状で、確認面から底面までの深さは 14cm であった。

遺物は出土していない。

P28（図版 12） 西区 B 7-22 グリッドで発見された浅いピットである。平面形態は円形で長径は 76cm、断面形態は弧状で確認面から底面までの深さは 20 cm であった。

遺物は土器 2 点が出土した。この 2 点を図化した（図版 18）。48・49 は一括遺物である。48 は植物繊維の混入した痕跡があるため、I 群に分類した。49 は条の細かい縄文 L R が斜位に施される。VI～VII群に分類した。

P29（図版 13） 東区 B 5-9 グリッドで発見された。平面形態は楕円形で長径 44 cm、断面形態は階段状で確認面から底面までの深さは 34 cm であった。

遺物は出土していない。

P31（図版 13） 東区 B 5-25 グリッドで発見された。西側の一部は調査区外となる。平面形態は長楕円形と推測され、長径は残存値で 81 cm、断面形態は U 字状で確認面から底面までの深さ 77 cm であった。柱穴であろう。

遺物は出土していない。

P32（図版 13） 東区 B 5-5 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 31 cm、断面形態は V 字状で、確認面から底面までの深さは 25 cm であった。

遺物は出土していない。

P33（図版 13） 東区 B 5-9 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 28 cm、断面形態は U 字状で、確認面から底面までの深さは 17 cm を測った。

遺物は出土していない。

P35（図版 13） 西区 C 8-16・17 グリッドで発見された浅いピットである。平面形態は円形で長径 52 cm、断面形態は箱状で確認面から底面までの深さは 10 cm である。

遺物は出土していない。

P36（図版 13） 西区 C 8-23 グリッドで発見された浅いピットである。平面形態は略円形で長径 48 cm、断面形態は弧状で確認面から底面までの深さ 8 cm であった。

遺物は出土していない。

P37（図版 13） 西区 B 8-22 グリッドで発見されたピットである。平面形態は楕円形で長径 42 cm、断面形態は台形状で、確認面から底面までの深さ 30 cm であった。

遺物は出土していない。

P38 (図版 13) 西区B 9-2 グリッドで発見された。平面形態は不整形で長径 52 cm、断面形態は台形状で、確認面から底面までの深さは 42 cmを測った。柱穴であろうか。

遺物は土器 1点が出土した。1点を図化した (図版18)。50 は①層から出土した。半隆起線が横位に施される。II群に分類した。

P39 (図版 13) 西区D 9-6 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径 33 cm、断面形態は箱状で、確認面から底面までの深さは 39 cmであった。

遺物は土器 1点が出土した。1点を図化した (図版18)。51 は④層から出土した。櫛描文が斜位に施される。VI群に分類した。

P41 (図版 14) 西区D 9-8・13 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径 72 cm、断面形態は半円状で、確認面から底面までの深さは 24 cmであった。

遺物は出土していない。

P42 (図版 14) 西区D 9-12 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径は 274 cm、断面形態は台形状で、確認面から底面までの深さは 30 cmを測った。

遺物は土器 1点が出土した。1点を図化した (図版18)。52 は①層から出土した。条痕文が縦位に施される。IV群に分類した。

P43 (図版 14) 西区D 9-18 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径 27 cm、断面形態はU字状で確認面から底面までの深さは 45 cmである。

遺物は出土していない。

P50 (図版 14) 東区C 4-22 グリッドで発見された。平面形態は不整形で長軸 37 cm、断面形態は階段状で、確認面から底面までの深さは 37 cmであった。

遺物は出土していない。

P51 (図版 14) 東区D 6-13 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 29 cm、断面形態は台形状で、確認面から底面までの深さは 13 cmであった。

遺物は出土していない。

P52 (図版 14) 東区D 6-13 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径 24 cm、断面形態はV字状で、確認面から底面までの深さは 17 cmである。

遺物は出土していない。

P53 (図版 14) 東区D 6-6 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径は 21 cm、断面形態はV字状で、確認面から底面までの深さは 13 cmであった。

遺物は出土していない。

P54 (図版 14) 東区C 6-4 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 23 cm、断面形態U字状で、確認面から底面までの深さは 29 cmを測った。

遺物は出土していない。

P55 (図版 14) 東区C 5-25 グリッドで発見された。平面形態は円形で長径 22 cm、断面形態台形状で、確認面から底面までの深さは 15 cmであった。

遺物は出土していない。

P56 (図版 14) 東区C 5-20 グリッドで発見された。平面形態は梢円形で長径 29 cm、断面形態はV字状

で、確認面から底面までの深さは 28 cm であった。

遺物は出土していない。

P57 (図版 14) 東区 D 5・16 グリッドで発見された。平面形態は橢円形で長径は 39 cm、断面形態は台形状で、確認面から底面までの深さは 26 cm を測った。

遺物は出土していない。

(7) 性格不明遺構

西区の西側端は表土直下からローム層が現れたが、このIV層を確認面として方形の周溝状の遺構が確認された。これを SX 1 として調査・整理を進めた。目の前の現象として確認されたものは溝であるため、SD に分類すべきであるが、後述するように、目的的な溝とは認識されないこと、そして塚であると推測されることから、そのまま SX の種別を用いて報告する。

SX 1 B・C 9・10 グリッドで確認された平面形態が方形をなす周溝状の浅い掘り込みである。最大長は 15.5m、最大幅は 9.7m であった。周溝の幅は 90 cm から 270 cm と偏差が大きかったが、これは現代の畝によって搅乱を受けた部分と本遺構の範囲とを区別できなかったことが影響している。掘り込みの横断面は弧状を呈しており、確認面から底面の最も深い部分までの深さは約 10 cm 程度と非常に浅い。この浅さに関しては、SX 1 の周辺では II 層（包含層）・III 層（漸移層）ともに観察されず、I 層（表土）下からいきなり IV 層の露出が認められたことから、遺構上部が削平されてしまった可能性が指摘できる。また、掘り込みの底面は凹凸が顕著であった。これらの特徴を総合すると、当遺構が定形的な溝として成形されたものではないことが窺える。

本遺構の西側の溝には中央付近で内側へ凹む部分があり、東側では不明瞭であるが、この凹みを重視すると、正方形を呈する 2 基の遺構が並置していた痕跡と推測できる。北側のものは 8 m × 8 m、南側のものが 7 m × 7 m 程度の方形の溝状の掘り込みを持つ遺構である。

以上、定形的な溝として成形されておらず、さらに正方形を呈する 2 基の遺構が並置すると想定されることから、本遺構が本来塚であり、その上部構造が削平された姿と理解しておきたい。

遺物は土器 12 点、剥片 3 点が出土し、そのうち土器 6 点を図化した（図版 18）。53～58 は一括遺物である。53 は条痕文が施されており、IV 群に分類した。54 は外面にハケによる調整が確認できる。甕の肩部と推定し、VI 群に分類した。55 は外面にハケのような跡がみられるが、磨耗が著しく明確に確認できない。56・57 は撲糸文のような跡がみられる。58 は外面に平行タタキ、内面に同心円當て具痕が確認できる。自然釉のためか、外面は緑色がかった灰オリーブ色を呈する。

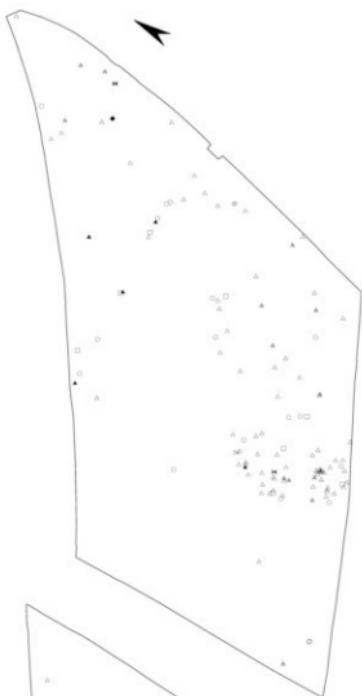
4 包含層出土遺物

(1) 出土土器の分布状況（第 5 図）

ここではまず、遺構出土土器を含めた、出土土器の全般的な分布状況をまとめる。第 5 図からは 3 つの傾向が指摘できる。1 つは標高の低い東区東側に多く分布することである。反対に、標高の高い西区西側の分布密度は低く、南西部はほとんど空白地帯をなしている。2 つ目は掘立柱建物跡のある D 4・5 グリッド付近に分布がまとまることがある。以上 2 つは、調査範囲における遺構の分布の粗密とほぼ対応しており、各時期を通じて調査区の東側での活動が頻繁であったことを窺わせる。3 つ目は東区西側には遺物がほとんど分布しないことである。西区東側でやや多くの土器が出土している状況をみても、この空白地



第5図 土器群別分布



第6図 石器種別分布

帶は不自然である。これは当該箇所の土壤の保存状況の悪さを反映するものだろう。

次に、群ごとの分布状況について概観する。なお、出土数の少ないI・III・V群と所属時期が不明なVII群については割愛する。

II群は東区の東側半分にほとんどが分布している。遺構内出土遺物以外、際立ったまとまりはみられない。西区東側にもわずかに点在するが、東区西側では出土しておらず空白地帯となっている。なお、II群の中で縄文時代中期前葉と中期中葉に所属するものをそれぞれ分けて図示したが、分布の傾向に際立った差はない。IV群は東区中央付近にいくつかのまとまりがみられる。97・98なども中央付近から出土した(図版1)。東区東側、西区東側にも分布しており、特に西区東側は北東部に偏りがみられる。東区西側では1点出土しているが、II群と同様に空白地帯の様相を呈す。VI群は東区北東側の標高が最も低い部分にまとまりがみられる。その他は東区、西区東側に点在している。西区東側においては、IV群と同様に北東部に分布が限られる。東区西側は農道付近になるとやはり遺物は分布しない。VII群は、VI群とほぼ同様の分布を示す。東区北東側にまとまりがみられる。西区東側では北東部に限定され、東区西側では農道付近には分布しない。

(2) 土器

I群(図版18) 59～61はI群に分類した。59は羽状縄文RLが横位に施される。60は磨耗が著しく文様が確認できず、61は縄文RLが横位に施される。60・61は植物繊維が混入した痕跡が認められたためI群とした。

II群(図版18・19) 62～92はII群に分類した。62は半截竹管による横位の沈線が2条描かれ、その間に連続した刺突が施される。63・64は同一個体の可能性がある。口縁部付近に縄文LRが横位に施され、その下位に半截竹管による沈線が巡り、それに区画されるように無文帯が作出されている。65は半截竹管により縦位に沈線が連続して施され、それを区画するように半隆起線文が横位に2条確認できる。下位の半隆起線文上には爪形文が施される。71・72も同様の文様構成である。73は半隆起線文が3条確認でき、その中央に爪形文が施される。66・67は文様構成がほぼ同じであり、半截竹管による縦位の連続した沈線が、横位の半隆起線文を境に2段に渡って施される。74は縦位の連続した沈線が1段のみ確認できるが、66・67と同様の文様構成と推定する。68・69は縦位の沈線と横位の半隆起線文の組み合わせであるが、69には無文帯が作出されているのが確認できる。70・75は縄文RLが横位に施されており、胎土中に土器碎片が含まれていることからII群とした。76は半隆起線文が横位に巡る。77はヘラ状工具により交互刺突文が描かれ、その下位には沈線が横位に巡る。胎土は粗いが、器壁は薄く作られる。78は爪形文が横位に2段巡っている。79は2条の半隆起線文の間に縦位の沈線が連続して描かれ、その沈線間に横位の刻みが施される。80も類似した文様構成を持つが、半隆起線文の間に横位・斜位の沈線が描かれる。81は縦位・横位の半隆起線文に区画され、地文に縄文LRが横位に施される。82は縄文LRが斜位に施してあり、胎土中に土器碎片が含まれる。84は横位の半隆起線文を区画するように「し」の字状の隆帯が貼り付けられる。隆帯には縄文RLが横位に施される。85・86は満巻き状の隆帯に刻みが施されたものである。87は縦位の半隆起線文上に細かく刻みが施される。88は棒状工具による連続した刺突が横位に施される。92は縦位の沈線が描かれた底部片である。

III群(図版19) 93～96はIII群に分類した。93は口縁部付近が横位のナデによって調整され、その下位に縄文LRが横位に施される。94は梢円形のモチーフが沈線によって描かれる。95は斜位の連続した刺突が

施される。96は外面に刺突が施されることから、三十稻場式であると推定する。

IV群（図版19・20） 97～126はIV群に分類した。97は胴部が砲弾状に張り出し、口縁部付近で括れをもち、口縁部がやや外反する。口縁部付近は繩文LRが横位に施され、括れ部分は無文帯となる。無文帯の下は上位が結節繩文LRを横位に、下位が繩文RLを横位に施している。口縁部付近の文様構成は、99や109・111と同様である。特に109は無文帯と結節繩文の境の括れが明瞭にみられる。98は結節繩文LRが横位に施され、底部付近は無文となっている。ただし、通常結節部分が水平に配置されるのに対し、98はやや斜めに配置されている。100は口縁部に斜位の刻みが施され、括れ部分は無文帯となっている。横位に巡る沈線と途切れ途切れの点線状の沈線が巡り、その下位に結節繩文LRが横位に施される。110も同じ文様構成と思われる。101は上位に結節繩文LRが横位に廻り、下位に結節繩文RLが横位に廻る。バーテンは逆となるが、112も上位に結節繩文RLが横位に廻り、下位に結節繩文LRが横位に廻る。102は半截竹管の裏側で描いたような幅広の沈線が横位に巡り、括れ部分の無文帯が観察できる。99・103～106では肥厚した口縁部が確認できる。104は肥厚している部位に横長の連続刺突が横位に巡る。105は肥厚した口縁部に横位の沈線が巡る。106は小波状口縁であり、さらに口縁部が肥厚している。107も同じく小波状口縁であり、外面に繩文LRが横位に施される。108は波状の口縁部と推定する。幅広の沈線が波状の頂点に向かって縦位に、それに直行するように横位に4条施される。やや深い沈線となるが、126の横位の沈線とも共通する。113～117はその他の結節繩文が施されたグループである。116は結節の上と下で条の細かさに違いがある。117は磨耗により繩文が明確に確認できなかつた。118～122は条痕文が施されたグループである。123は地文に繩文LRが横位に施され、沈線によって文様が描かれる。

V～VII群（図版20） 127は外面に縦位の平行沈線が施される。弥生時代の壺と推定した。

VI群（図版20） 128～148はVI群に分類した。128は口縁部が大きく外反する器形であり、3列並行沈線が横位・斜位に巡る。おそらく136なども同類の土器であろうと思われ、宇津ノ台式系統と推定する。129・130は同一個体と推定する。口縁部の内間に斜位の刻みを施す小松式の特徴をもつ、また、131～134の小波状口縁も小松式の特徴である。137・138は簾状文が施され、その上から横位の櫛描文が施される。138の櫛齒状工具は7条一単位となっている。139～143は櫛描文が施されたグループである。139は壺の肩部と推定され、6条一単位の櫛描文が波状に施される。140は斜位に波状の櫛描文が施され、141・142は横位と波状の櫛描文が確認できる。137～142は小松式あるいはその影響を受けた小松式系統と推定する。143は横位と櫛齒状の櫛描文と思われるが、これは栗林式系統と推定する。144・145は内・外面ともハケによる調整がされる。146は3列並行沈線が横位・斜位に施される。

VI～VII群（図版20） 149～151はVI～VII群に分類した。149は口縁部の内・外面に沈線が横位に施される。150・151は外面に条の細かな繩文LRが横位に施され、内面は横位のハケにより調整される。

VII群（図版21） 152～173はVII群に分類した。152は口縁部に突起が付きその頂点に刺突が穿たれる。交互通突文と重菱形文が施されることから、天王山式と推定する。155・158～160でも同じく互通突文が確認できることから、天王山式と推定する。155は壺の口縁部から胴部であり、頸部が「く」の字状に括れている。口縁部には斜位の刻みが施され、一定の間隔で方向を変える手法が用いられる。また、互通突文が頸胴部界を区画するなどの特徴から、155は天王山式の一地方型式である砂山式に該当する。158は152と同様に互通突文と重菱形文が施される。153は口縁部の内・外面に連続した押圧が施され、内面にはさらに横位の沈線が施される。連続した押圧は幅広の刻みとも捉えることができ、施文具の違いによるものと思われる。154は口縁部の内・外面に刻みと横位の沈線が施される。156・157は口唇部に連続

した刺突が施される。161～163は地文に繩文R Lが横位に施され、上開きの連弧文が描かれる。2列並行沈線で描かれる連弧文は天王山式によくみられる手法である。164は繩文R Lが横位に、3列並行沈線が横位に施される。この沈線は重菱形文を描いていると推定した。165・166は外面に繩文L Rを横位に施され、内面はハケにより調整される。167は外面を縦位のハケにより調整される。168は3列並行沈線が斜位に施され、上部に突起が剥がれたような跡がある。169は横位・斜位の沈線で文様が構成されており、器面が磨いているかのように整っている。171・173は繩文R Lを斜位に施しており、条が縱走している。

VII群（図版21） 174～192はVII群に分類した。174・175は外面の口縁部に沈線が横位に巡る。177は半截竹管による横位の沈線と縦位の櫛描文が施される。179は傾きから浅鉢と推定する。180は頭部の括れ部分と思われるが、無文帯と撚糸文が施される。181～185にも撚糸文が施される。特に185は網目状撚糸文となっている。186はヘラ状の工具による縦位の刺突が、横位の沈線を挟んで2段にわたり連続で施される。187は繩文R Lが横位に施され、188は半截竹管による沈線で4重に円形の文様が描かれる。189は底面を観察すると、胎土中の砂目が放射状に動いているのがみられ、98の底面と共通する。190は立ち上がりの角度が浅いことから浅鉢の可能性がある。191は底部が台状に、真っ直ぐ立ち上がってから傾斜がつく点で特徴的である。192は底径が小さく、小形の壺の可能性がある。

その他（図版21） 193・194は須恵器で、195は土師質土器である。包含層から点上げしたが、歎や表土からの転圧による混入の可能性がある。193は外面にタタキメと内面に同心円當て具痕が確認できる。194は器壁がやや厚めではあるが、有台杯と推定した。195は胎土中に海綿骨針が混入するのが特徴的である。

（3）石器

出土石器の分布は、IV群土器の分布と共通性がみられる（第8図）。掘立柱建物跡の周辺に分布の中心があり、後述する石核（204）などもここから出土している。恐らく、この範囲で頻繁な活動（廃棄行動）があったのだろう。ただし、あたかも掘立柱建物跡を避けるかのような分布、特に掘立柱建物跡の南側への分布の偏重は、掘立柱建物の造営に伴って遺物が移動したことを窺わせる。個々の遺物を観察すると、石鏽をはじめとして、IV群土器に伴うと思われる資料が多く、したがって、掘立柱建物と、これら石器群とはおおむね帰属時期を異にすると考えたい。前述したSB1-P6出土の石錐（196）も、土坑覆土に混入したものと解釈される。

以下、図化資料について記載する（図版22）。199・200は石鏽である。199は玉髓の横長剥片を素材とする凸基の石鏽で、裏面に主要剥離面を残す。左側縁を中心に赤化がみられ、製作に際しての熱処理を想起させる。200も玉髓製だが被熱が著しい。先端部の欠損や基部左側縁の大きな剥離は、被熱によるものであろう。201は石錐である。頁岩の剥片を素材としており、周縁部加工によって端部が作りだされている。202は蛇紋岩製の小形磨製石斧である。刃部は欠損している。

203は磨石類に分類される。安山岩の円錐を素材とする。正面及び裏面に顕著な凹部が残されている。204は石核である。黒色ガラス質安山岩の分割礫を素材とする。丹念な打面形成及び頸部調整が確認できる。90°打面転移を行っており、実測図上面を打面とする剥片剥離と、裏面を打面とする剥片剥離を確認できる。図化はしていないが、無斑晶安山岩の礫を分割し、この分割面を単設打面とした石核も出土している。今回の調査で出土した2点の石核がいずれも分割礫を用い、打面調整を行っていることは、立矛遺跡における石器製作（剥片剥離工程）を考える上で興味深い。

第V章　まとめ

1 はじめに

立矛遺跡は水神平式系の壺形土器の個体資料が採集され、広く紹介されたことから〔渡邊1999〕、これまで弥生時代前期を中心とする遺跡と捉えられ、さらに壺棺再葬墓が存在する可能性も指摘されていた〔越路町史編さん委員会1998〕。しかし、今回の調査では異なる状況が見られた。以下、今回の調査成果の中でもとくに縄文時代晚期以降に焦点を絞り、この時期における遺跡の変遷について検討し、報告のまとめとしたい。

2 遺跡の保存状況

今回の調査で最も多く出土したのは、縄文土器／弥生土器の区別も適わない小破片の土器＝Ⅷ群土器であった。これは調査区の大半の保存状況が非常に悪かったことを示している。調査区全体に現在の歴跡が走り、それらのほぼすべてが漸移層にまで達していたことは、このような状況を生んだ原因の一つであろう。また、第IV章で報告したように、調査区中央の農道の東側には遺物がほとんど出土しない範囲がある。この範囲は帯状に伸びており、土壤の性状が他の地点と異なり非常に硬いという所見をあわせると、農道の敷設に際して、削平・変更されたと推測される。この付近はピットが点在しており、遺物も包蔵されていただろう。

S X 1が発見された西区西端でも、漸移層まで削平を受けており、保存状況が悪かった。この付近では畑の耕作に伴ってアメリカ型石鍬を含む縄文時代晚期～弥生時代の遺物が採取されているが、これは近年の土地利用によって包含層が搅乱を受けてしまったことの裏返しである。また、西区南西部は遺構・遺物ともにほとんど出土せず、遺跡の外縁部だと考えられる。

3 縄文時代晚期以降における遺跡の変遷

調査区からは縄文時代前期～弥生時代後期、そして古代の遺物が出土している。時期が特定できた土器の中では縄文時代晚期の土器（IV群）が最も多かった。したがって、調査区における主たる活動時期は、縄文時代晚期だと言える。IV群では、結節縄文を施した粗製土器が大半を占めた。この中には98のように結節部が斜位になるものが少量含まれている。

前章で見たように、IV群は東区中央付近にいくつかのまとまりがみられたほか、東区東側や西区東側にも分布しており、柱穴やピットなどの遺構からもしばしば出土する。IV群の時期の活動が最も活発であった結果、調査区の包含層全体に広く拡散したと言えるが、遺構出土資料の多くは二次的な分布であると理解される。むしろ東区中央付近において、IV群のまとまり、97や98という半完形品の出土、包含層からの集石遺構（S S 2）の検出が、位置的には重なることに留意すべきであり、この付近における包含層の保存状況の良さを示すとともに、集石遺構がIV群の時期に構築されたことを物語っている。集石遺構は1基しか検出できなかつたが、I層中からは多くの焼襷が出土しており、より多くの集石遺構が構築されていた可能性がある。このことから、縄文時代晚期は、集石遺構が構築・使用される野営地的な場所として機能していたと推測される。また、SK5からはIV群がまとまって出土しており、この時期に帰属すると考えられる。

章のはじめで触れた水神平式系の壺形土器は、IV群に後続するV群に相当するが、今回の調査ではV群に含まれる土器を得ることができなかつた。また、調査に臨んで期待された再葬墓も確認できなかつた。再葬墓は集落と離れた地点で発見される例が多く、遺構の保存状態が良ければ、遺物が拡散することも少ないと推測される。調査区の広い範囲にわたって近年の地形変化を受けているにもかかわらず、V群が出土しなかつたことは、調査区の北、旧来の遭跡範囲一無論壺形土器もここで採集されている一に再葬墓が良好な状態で保存されていることを物語っているのだろう。今回の調査結果は調査区近隣における再葬墓の存在を否定するものではなく、むしろ再葬墓の局在性を示す材料だと考えたい。

このように、IV群の時期が野営地的、V群の時期は墓域（ただし、調査区外）であったと捉えられるが、調査区からは、集落的な要素をもつ遺構も発見されている。B 1・2 グリットで検出した SD 7 は相当の規模があり、断面形もしっかりと台形を呈する。今回は部分的な検出に留まり、その性格を明らかにすることはできなかつたが、集落構造において計画的に配置され、そして利用された可能性を指摘できる。さらに、C・D 4 グリットでは掘立柱建物跡を 3 棟検出した。特に S B 1 と S B 2 は、柱穴各々の規模や、根固め石の存在から相当規模の掘立柱建物だと推測されるが、柱穴が約 7 m 間隔で、しかも略方形に配置されており、これまで知られている事例から逸脱するものである。また、D 6 グリットの P 15 は根固め石を伴う柱穴であり、この付近にも建物の分布が広がっていたと推測される。遺物の出土状況等によって確認されたものではないが、これらはVI群～VII群の時期に構築されたと捉えたい。そして、ここに集落を想定したいところであるが、それには掘立柱建物として規格外とも言える S B 1 と S B 2 に対する多角的な検討と位置づけ、そして、調査区北側の発掘調査による、掘立柱建物群と SD 7 との関係の把握が必要となるだろう。今後の課題としたい。

ここで VII群・VIII群土器について補足しておく。VI群では小松式として捉えられる北陸系の土器が大半を占め、信州系の栗林式（143）、東北系の宇津ノ台式（128・136）が若干見られた。これに続くVII群は、東北系の天王山式に属する土器群が大半を占める。加えて、在地化しているものの砂山式（155）も抽出できた。砂山式は、新潟県では北半に多く分布する土器であるが、市内の横山遺跡や堅正寺遺跡などでも出土しており、この事例によって長岡市南部まで分布圏が及ぶことが示された。

最後に、調査区西端から発見された S X 1 であるが、これは 2 基の塚跡と理解する。周辺には、かつて 136 基にも及ぶ塚が南北方向に並んでいた。この朝日百塚は、宝應 6 年（1756）刊行の『越後名寄』にも記述があるが、昭和 42 年（1967）越路原総合開発事業によって大部分が失われ（越路町教委 1970）、現在は 15 基を残すのみとなっている。開発に先立つ調査で塚の配列図が作成されているが、これには S X 1 に該当する塚は確認できない。朝日百塚の築造年代については、これが單一時期に築造されたものではなく、ある程度の幅をもつているとすると見解がある（越路町史編さん委員会 1998）。S X 1 は、塚が新規に築造されていくだけでなく、その一方で取り壊される塚もあり、その最終的に残された配列が昭和 42 年の姿であつたことを示唆している。朝日百塚の形成を論考するあたり、一つの視座を得たと言えよう。

以上のように、今回の調査成果では地域史を明快に語るには至らず、多くの課題が提示された。これら課題に対する答えの多くは、調査区北の未発掘区域において V 群土器と再葬墓の有無、SD 7 の在り方を把握すること、そして調査区南の未発掘区域において、今回検出した S B 1～3 を含めた掘立柱建物跡の展開を把握することで得られるのだろう。だが、発掘調査と遭跡保護は根本的には相克するものであり、そのジレンマの克服は埋蔵文化財行政にとって大きなテーマだと言える。

第5表 挖立柱建物跡

遺構名	位置		平面形態	構造	床面積 (m ²)	桁行(m)		梁間(m)		長軸方向
	調査区	グリッド				北	南	東	西	
SB1	東区	C-D4-5	正方形	1間×1間	49.3	7.11	7.08	6.95	6.86	N~65°~E
SB2		C-D4-5	正方形	1間×1間	47.8	7.41	7.59	6.46	6.75	N~81°~E
SB3	東区	D4	長方形	？×2間	-	8.68	-	-	-	N~69°~E

第6表 挖立柱建物跡関連ビット

() 推定値 () 現存値

遺構名	ビットNo.	平面形態	断面形状	規模(m)			底面標高 (m)	覆土	遺物	備考
				長径	短径	深さ				
SB1	P6	楕円形	箱状	(0.68)	0.56	(0.92)	84.91	5	-	
SB1	P11b	楕円形	箱状	(0.42)	0.40	(0.83)	83.91	1	Ⅳ群	
SB1	P16b	円形	U字状	(0.63)	0.64	1.26	83.24	2	Ⅳ群	
SB1	P25a	楕円形	U字状	(0.30)	(0.21)	(1.07)	84.21	3	-	
SB2	P9	略方形	箱状	1.08	0.96	(1.20)	83.64	14	Ⅳ群	底面に硬化面あり
SB2	P11a	略方形	箱状	0.67	0.61	(0.96)	83.84	2	Ⅳ群・RF	
SB2	P16c	略方形	U字状	0.52	0.52	0.69	83.70	2	Ⅳ・Ⅳ群	
SB2	P25b	楕円形？	U字状	(0.40)	(0.30)	0.60	83.57	4	-	
SB3	P23	長楕円形	漏斗状	0.88	0.37	0.65	84.44	2	Ⅳ・Ⅳ群	
SB3	P17b	楕円形	階段状	(0.40)	0.32	0.35	84.45	1	Ⅳ・VI・Ⅳ群	
SB3	P13	楕円形	階段状	0.67	(0.36)	0.23	84.22	-	-	

RF:二次加工のある剥片

第7表 集石遺構

遺構No	位置		埋数	埋分布形	埋分布長軸 (m)	埋分布短軸 (m)	埋レベル差 (cm)
	調査区	グリッド					
SS2	東区	C4-8	14	楕円形	0.65	0.42	5.8

第8表 土坑

() 現存値

遺構No	位置		形状			規模(m)		底面標高 (m)	長軸方向	覆土	遺物	備考
	調査区	グリッド	平面形態	断面形状	長径	短径	深さ					
SK5	東	B7-5	不整形	弧状	1.86	1.31	0.21	86.05	N~12°~E	2	V~Ⅳ群	
SK8	西	B2-22-23	長方形	箱状	2.00	1.08	0.26	94.06	N~84°~W	2	Ⅳ群	墓坑？
SK40	西	B6-6	楕円形	箱状	0.94	(0.52)	1.24	83.06	N~84°~E	15	なし	躰穴？

第9表 溝状遺構

() 現存値

遺構名	位置		規模(m)			傾斜方向(高→低)	長軸方向	覆土	遺物	備考
	調査区	グリッド	長さ	幅	深さ					
SD3	東区	B+C2~4	(17.7)	0.27	0.19	西→東	N~95°~E	2	Ⅳ・Ⅳ群・磨石・石核・不定形石器	多量の礫を含む
SD7	東区	B1+2	(9.2)	1.25	0.59	西→東	N~89°~E	3	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ群・RF	
SD20	東区	B1+2	(12.9)	0.28	0.20	西→東	N~88°~E	1	Ⅳ・Ⅴ群・石皿	

RF:二次加工のある剥片

第10表 その他ピット

()残存値

ピットNo.	位置		平面形態	断面形状	規模(m)			底面標高 (m)	覆土	遺物	()残存値
	地区	グリッド			長径	短径	深さ				
P10a	東区	D4-21・22	円形	半円状	0.73	0.62	0.42	84.49	4	IV群・石核	
P10b	東区	D4-22	梢円形	-	(0.64)	(0.20)	0.45	84.88	-	-	
P15	東区	D6-12・13	梢円形	U字状	0.64	0.46	0.60	85.37	4	磨石類	根固め石あり
P18	東区	D4-2・3	円形	半円状	0.51	0.44	0.20	84.50	2	弥生土器	
P22a	東区	B4-15	梢円形	箱状	0.43	0.32	0.10	84.70	4	罐群	
P22b	東区	B4-15	梢円形?	-	(0.12)	0.30	0.09	85.03	-	-	
P27	東区	C4-21	不整形	階段状	(0.45)	(0.28)	0.14	85.06	3	-	搅乱に切られる
P28	西区	B7-22	円形	弧状	0.76	0.76	0.20	86.13	3	I群・VI～VII群 ・RF	
P29	東区	B5-9	梢円形	階段状	0.44	0.37	0.34	85.32	2	-	
P31	東区	B5-25	長梢円形?	U字状	(0.81)	0.52	0.77	85.01	4	-	
P32	東区	B5-5	円形	V字状	0.31	0.27	0.25	85.18	2	-	
P33	東区	B5-9	円形	U字状	0.28	0.24	0.17	85.25	3	-	
P35	西区	C8-16・17	円形	箱状	0.52	0.49	0.10	86.61	-	-	
P36	西区	C8-23	円形	弧状	0.48	0.45	0.08	86.69	-	-	
P37	西区	B8-22	梢円形	台形状	0.42	0.32	0.30	86.30	-	-	
P38	西区	B9-2	不整形	台形状	0.52	0.43	0.42	86.31	6	II群	
P39	西区	D9-6	梢円形	箱状	0.33	0.24	0.39	86.48	5	VI群	
P41	西区	D9-8・13	梢円形	半円状	0.72	0.60	0.24	86.88	3	-	
P42	西区	D9-12	円形	台形状	0.27	0.27	0.30	86.86	1	V～VII群	
P43	西区	D9-18	梢円形	U字状	0.27	0.22	0.45	86.91	-	-	
P50	東区	C4-22	不整形	階段状	0.37	0.28	0.37	84.92	-	-	
P51	東区	D6-13	円形	台形状	0.29	0.25	0.13	85.68	-	-	
P52	東区	D6-13	梢円形	V字状	0.24	0.22	0.17	85.73	-	-	
P53	東区	D6-6	梢円形	V字状	0.21	0.17	0.13	85.67	-	-	
P54	東区	C6-4	円形	U字状	0.23	0.21	0.29	85.52	-	-	
P55	東区	C5-25	円形	台形状	0.22	0.21	0.15	85.54	-	-	
P56	東区	C5-20	梢円形	V字状	0.29	0.24	0.28	85.37	-	-	
P57	東区	D5-16	梢円形	台形状	0.39	0.31	0.26	85.33	-	-	

RF:二次加工のある剖片

第11表 性格不明遺構

<>は平均値

遺構名	位置		全体規模(m)			溝の規模(m)			長軸方向	遺物
	調査区	グリッド	長さ	幅	幅	深さ				
SX1	東区	B+C9-10	15.5	9.7	<1.08>	<0.1>			N-10°-E	調文土器・弥生土器・須恵器・磁器・削片・RF・石核

RF:二次加工のある剖片

第12表 土器觀察表(1)

第13表 土器觀察表(2)

第14表 土器觀察表(3)

器 名 号	出土地點 %	出土遺物 名	種類	器體	分類	殘存部 位	口沿 形	底面 形	壁厚 mm	施土		外觀		內觀		性質-觀察方法		付箋等 備考
										直徑 mm	高度 mm	直徑 mm	高度 mm	直徑 mm	高度 mm	直徑 mm	高度 mm	
75. D12-1	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	12.8	7.0	12.8	7.0	12.8	7.0	12.8	7.0	直筒
80. C4-4	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	14.0	8.2	14.0	8.2	14.0	8.2	14.0	8.2	直筒
81. D13-13	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	直筒
82. C3-12	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	直筒
83. D1-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	14.0	8.1	14.0	8.1	14.0	8.1	14.0	8.1	直筒
84. D5-8	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	直筒
85. C3-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
86. C4-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	13.3	4.9	直筒
87. C5	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
88. BI-19	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
89. D4-13	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
90. D4-12	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
91. C4-2	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
92. C3-25	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
93. BI-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
94. D5-23	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
95. C3-14	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
96. C4-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
97. C4-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
98. D12-8	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
99. D12-26	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
100. C4-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
101. C3-28	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
102. D3-8	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
103. E10	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
104. BI-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
105. BI-3	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
106. BI-7	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
107. D10-14	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
108. C9-22	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
109. C4-8	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
110. C4-6	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
111. C4-16	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
112. D2-21	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
113. C4-6	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
114. C4-11	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
115. BI-10	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
116. BI-13	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒
117. BI-1	-	直筒土器	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒	-	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	13.0	4.9	直筒

第15表 土器觀察表(4)

第16表 土器觀察表(5)

第17表 石器観察表

報告NO.	記号	器種	分類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
196	TB11-166	石錐		安山岩	3.8	1.2	0.8	4.14	
197	TB11-SX3-111(SD03)	不定形石器		黒色ガラス質安山岩	10.8	16.3	4.4	406.67	
198	TB11-1238(SD20)	石皿		安山岩	(11.6)	(14.7)	(4.1)	966.78	被熱
199	TB11-777	石鍬		玉髓	2.2	1.5	0.5	1.25	被熱
200	TB11-C4	石鍬		玉髓	(1.9)	1.3	0.6	(0.82)	先端部欠損 被熱苦しい
201	TB11-1230	石錐		頁岩	5.0	2.6	0.7	7.94	
202	TB11-C4	磨製石斧		鈍紋岩	(4.4)	(2.7)	0.6	15.6	刃部欠損
203	TB11-1150	磨石類	圓・盤	安山岩	13.9	10	6.6	1165.5	
204	TB11-1670	石核		黒色ガラス質安山岩	8.0	12.4	11.0	1419.32	90° 打面転移

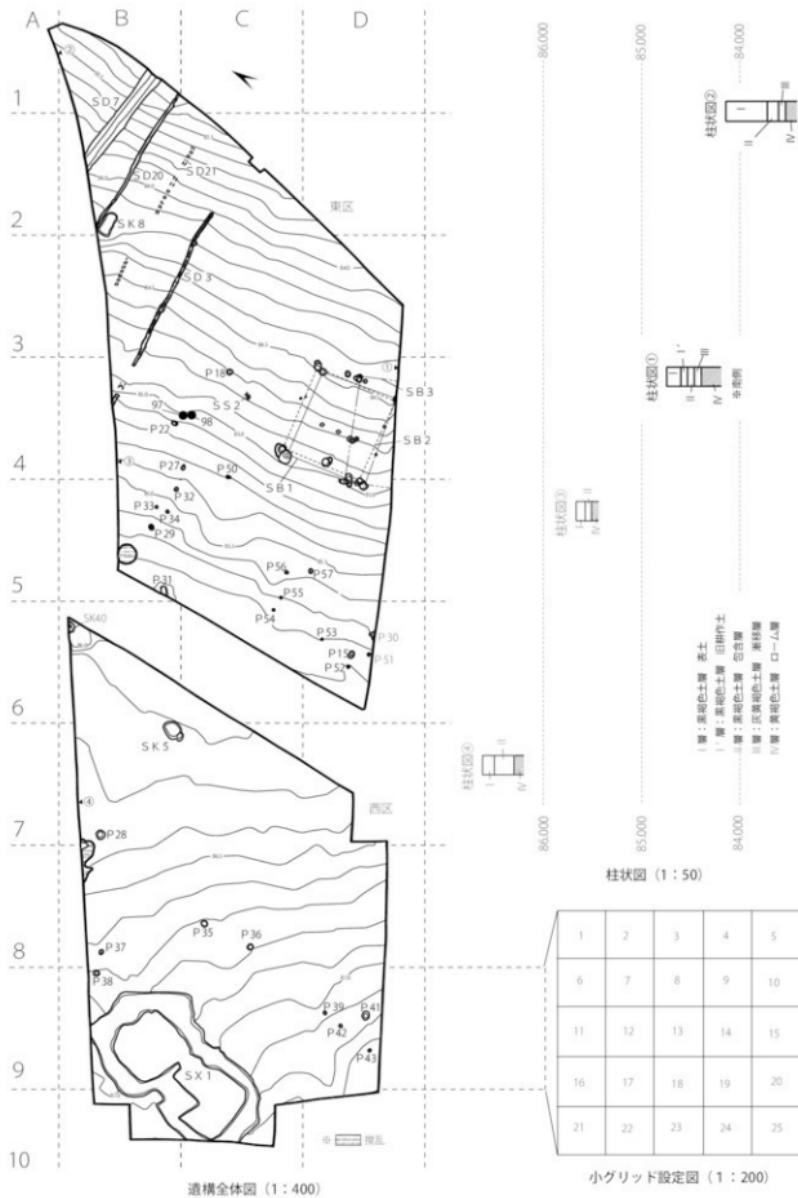
参考文献

- 魚沼丘陵团体研究グループ 1983 「魚沼層群の地質」『地団研専報』N o. 26. 5~21頁
- 小国町教育委員会 2004 『新潟県利根郡小国町埋蔵文化財調査報告書第5集 水上遺跡』 小国町
- 加藤正明・大矢忠雄 1993 「越路町の階段地形のおいたちをさぐる—越路原から釜ヶ島までの段丘のおいたち—」『越路の大地』上巻 越路町教育委員会・新潟県西葛ループ。89-102頁
- 京ヶ瀬村教育委員会 2003 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大別遺跡・猫山遺跡・大曲川塙遺跡』 京ヶ瀬村
- 越路町教育委員会 1965 『朝日遺跡』 越路町
- 越路町教育委員会 1970 『越路原総合調査報告書 朝日百塚 並松遺跡』 越路町
- 越路町教育委員会 2004 『朝日遺跡』 越路町
- 越路町史編さん委員会 1998 「朝日百塚」『越路町史』資料編1 原始・古代・中世 越路町。330~341頁
- 駒形敏朗 2006 「新潟県長岡市岩野原遺跡の掘立柱建物跡—調文時代の掘立柱建物跡の検討に向けて—」『坂詰秀一先生古希記念論文集 考古学の諸相』 II 1103~1118頁
- 田中 靖 1985 「東山丘陵西麓探査の弥生時代後期及び古墳時代の遺物」『三條考古学研究会機関誌』第3号 三条考古学研究会 1~10頁
- 長岡市教育委員会 1977 『埋蔵文化財発掘調査報告書 藤橋遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 1987 『横山遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 1991 『長岡市内遺跡群発掘調査報告書 瓜剣遺跡 三ノ輪遺跡 六右工門清水遺跡 三貫梨遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 1991 『藤橋遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 2007 『立矛南遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 2008 『浦橋遺跡』 長岡市
- 長岡市教育委員会 2011 「立矛遺跡試掘確認調査」『平成22年度長岡市遺跡発掘調査報告書』 長岡市。 12~13頁
- 長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977 『埋蔵文化財調査報告書 藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡』 長岡市
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集 堂付遺跡・百束東E遺跡・百束C遺跡』 新潟県
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集 金塚遺跡・三住遺跡・割目A遺跡』 新潟県
- 安田町教育委員会 1992 『新潟県安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡 1990年調査報告書』 安田町
- 渡辺秀男 1998 「2、越路町とその周辺地域の段丘面上のローム層について」『越路町史』別編1 自然 越路町。19~36頁
- 渡辺秀男 2007 「新潟県後平野南西部の河成段丘と構造運動」『地球科学』61巻 地球学团体研究会。 29~42頁
- 渡邊裕之 1999 「第1項 弥生前期・中期前葉」『新潟県の考古学』 高志書院。227~231頁
- 渡邊裕之 2002 「『朝日式』の再検討—延命寺ヶ原遺跡出土土器の検討をとおして—」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号 新潟県立歴史博物館。45~71頁

図 版

図版 1

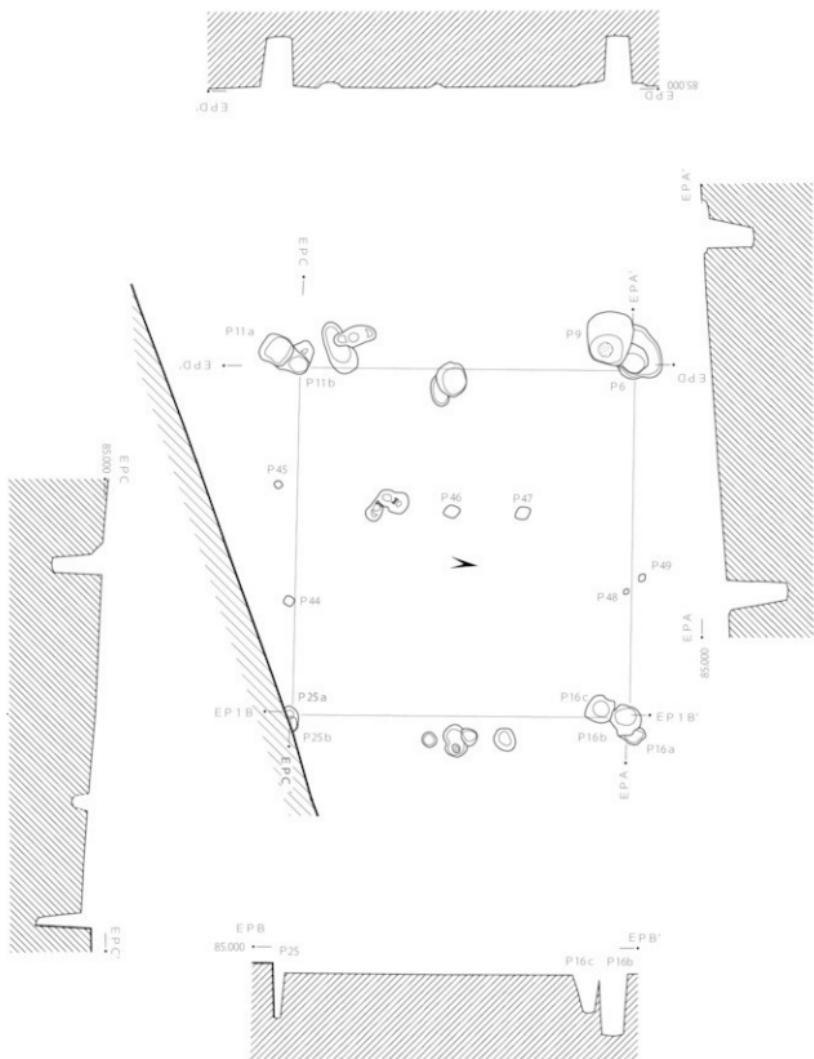
調査区全体図・土層柱状図



個別遺構図①

図版 2

掘立柱建物跡
SB 1

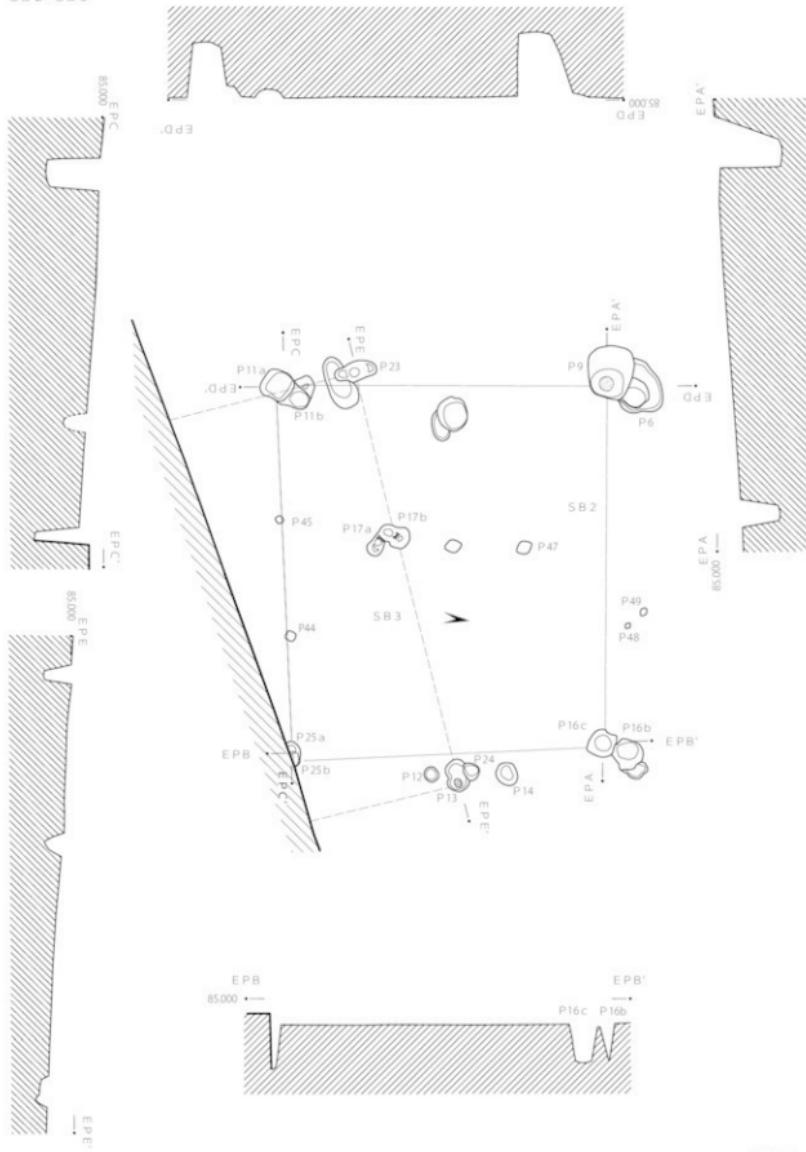


(1 : 100)

図版 3

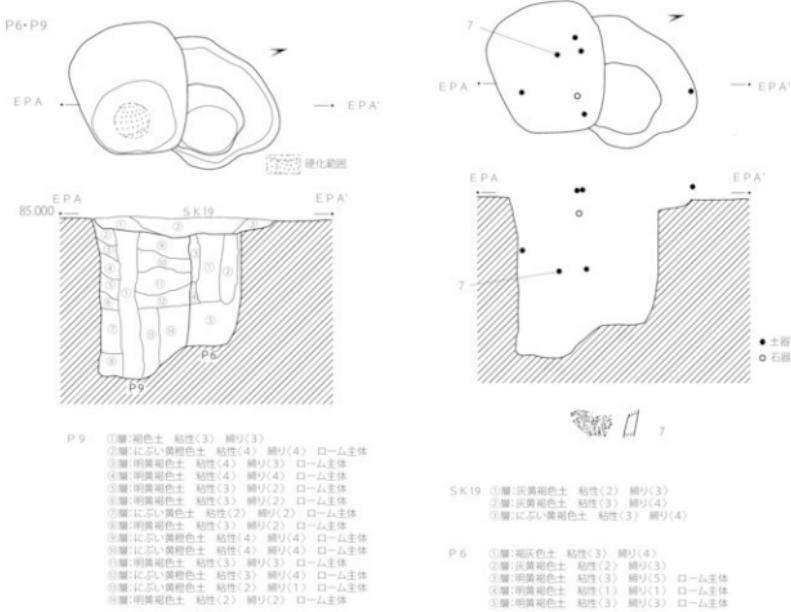
個別遺構図②

SB 2・SB 3

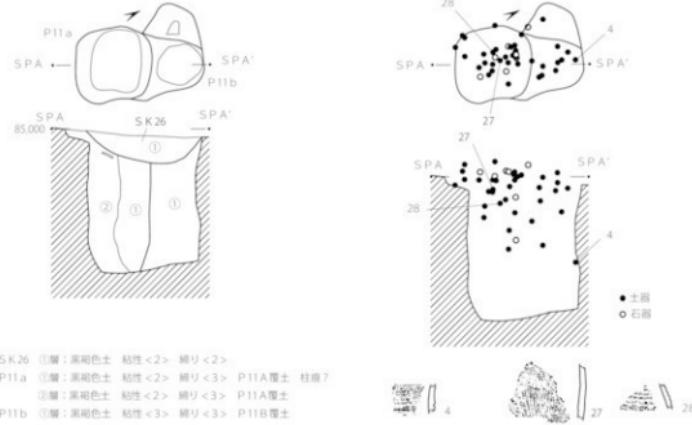


(1:100)

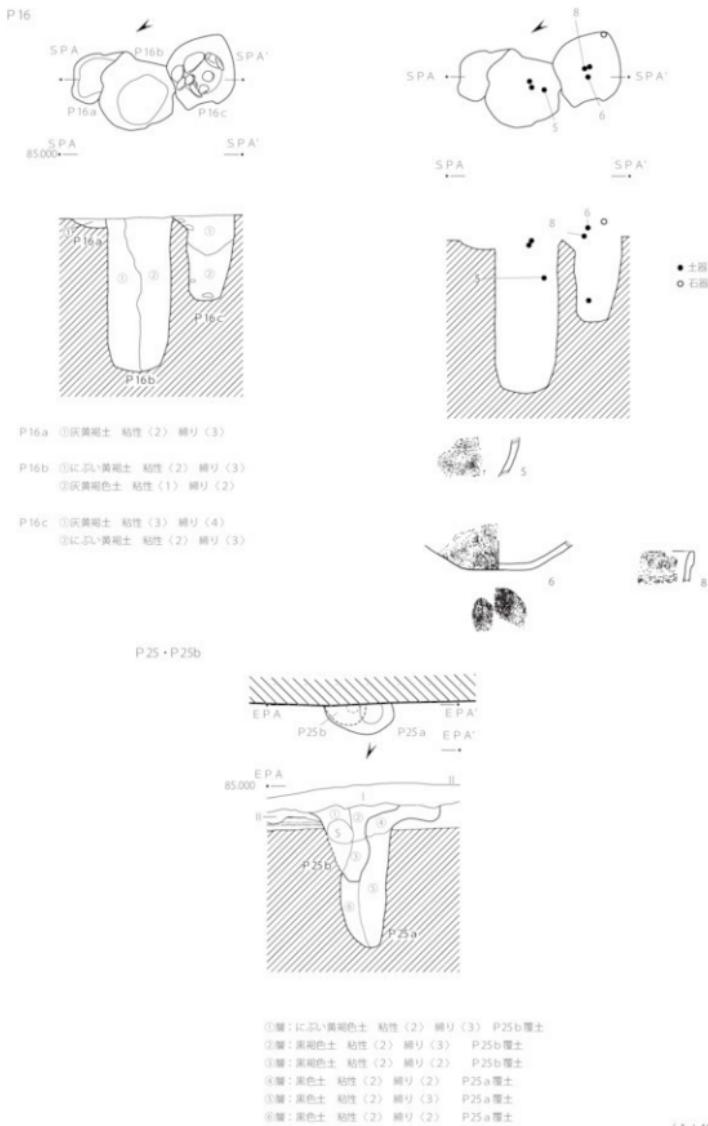
SB1・SB2関連ビット

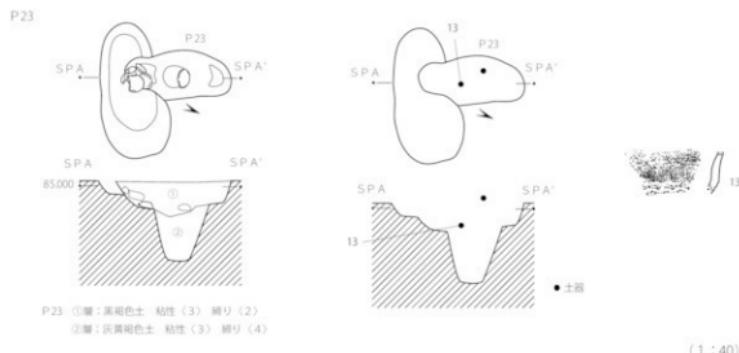
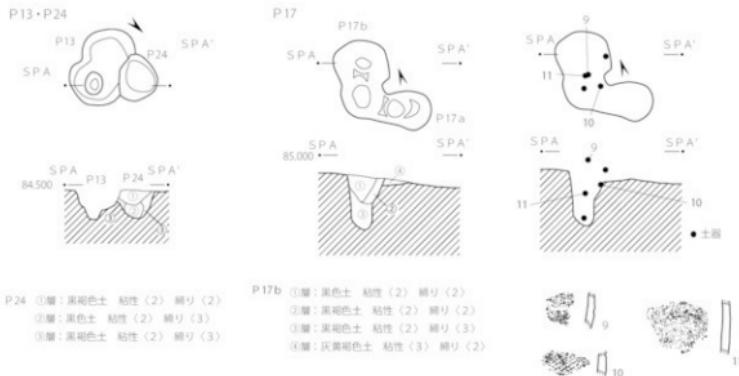


P11 • SK26



SB1・SB2関連ピット





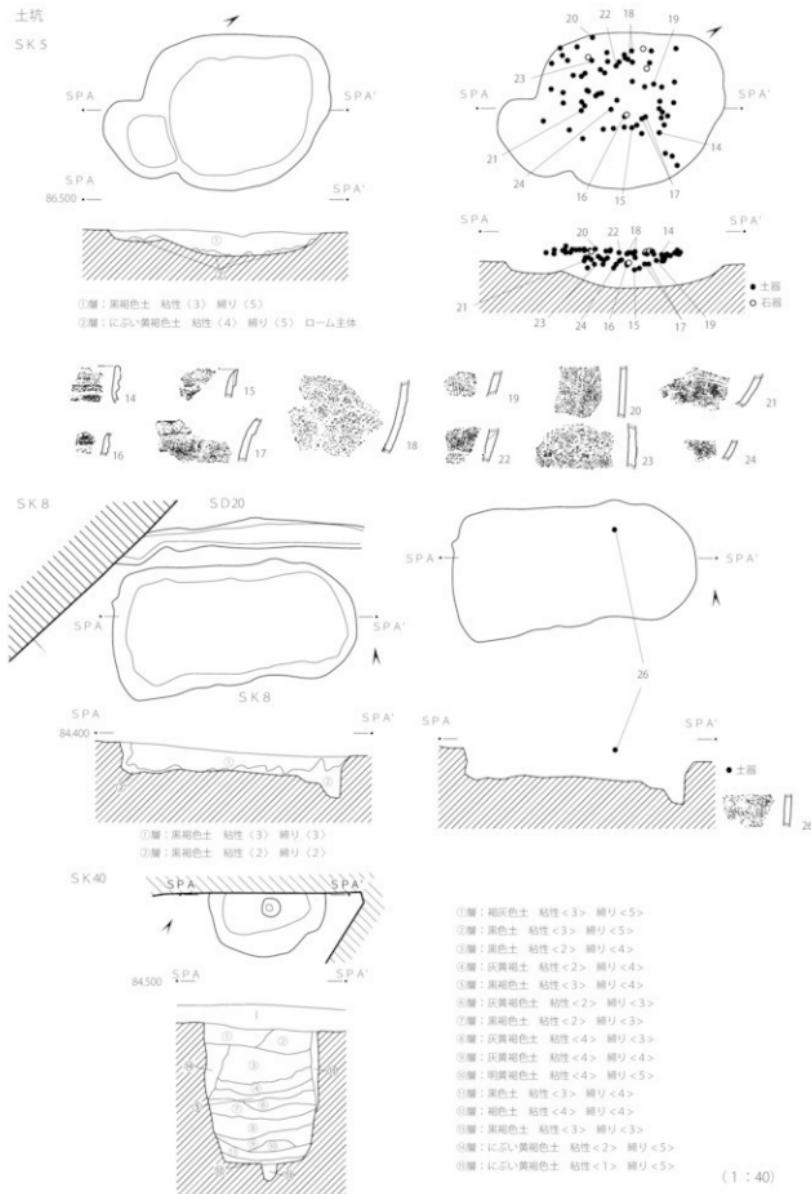
集石遺構

SS 2



図版 7

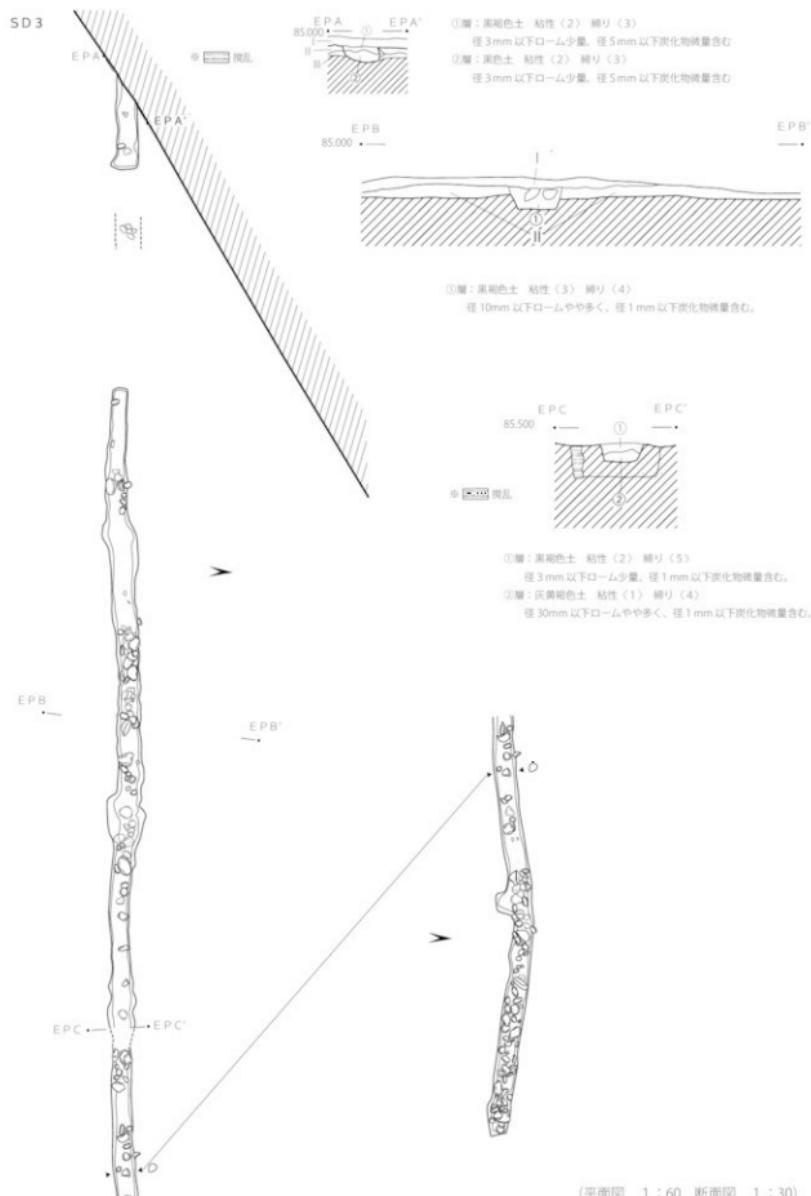
個別遺構図⑥



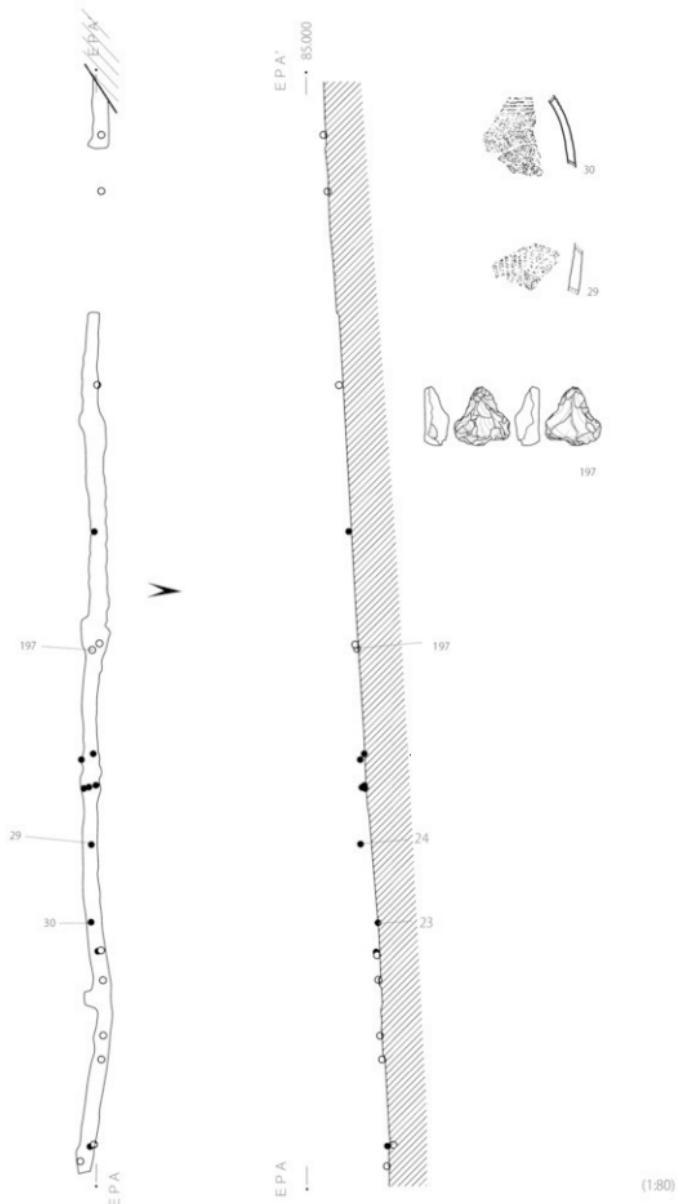
(1 : 40)

個別遺構図⑦

圖 版 8

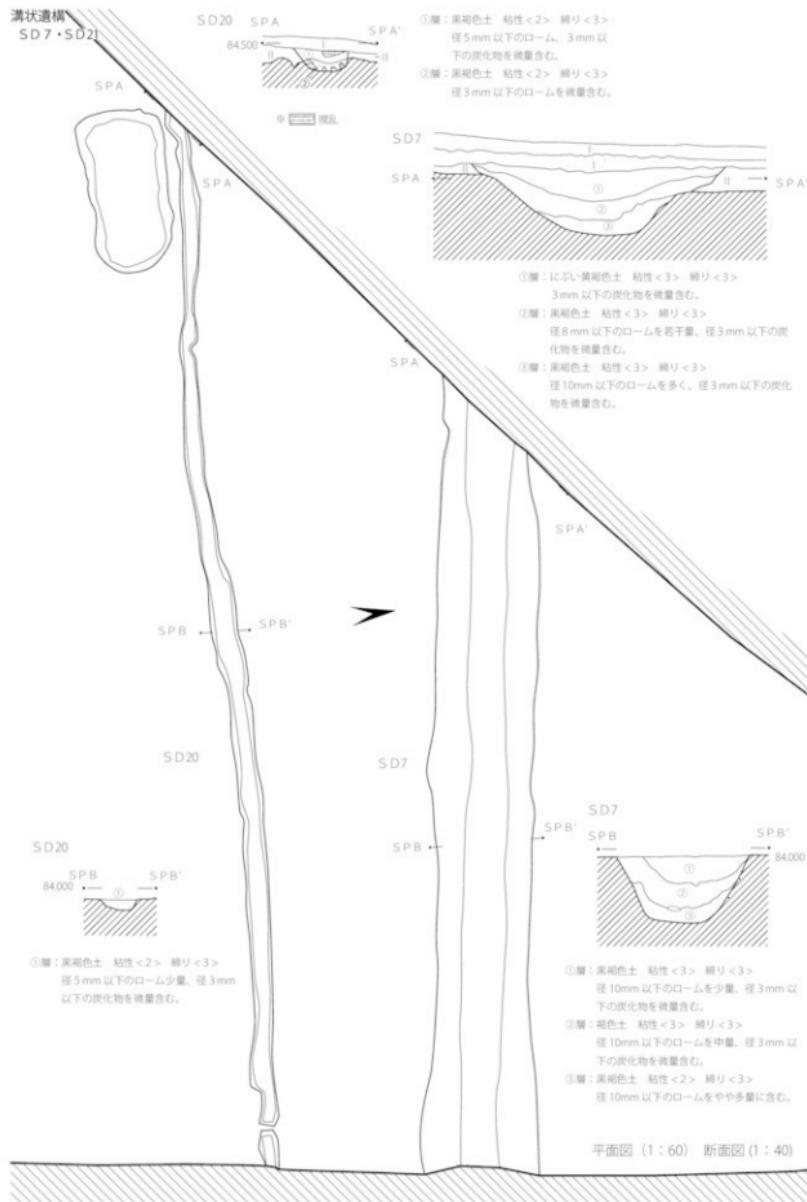


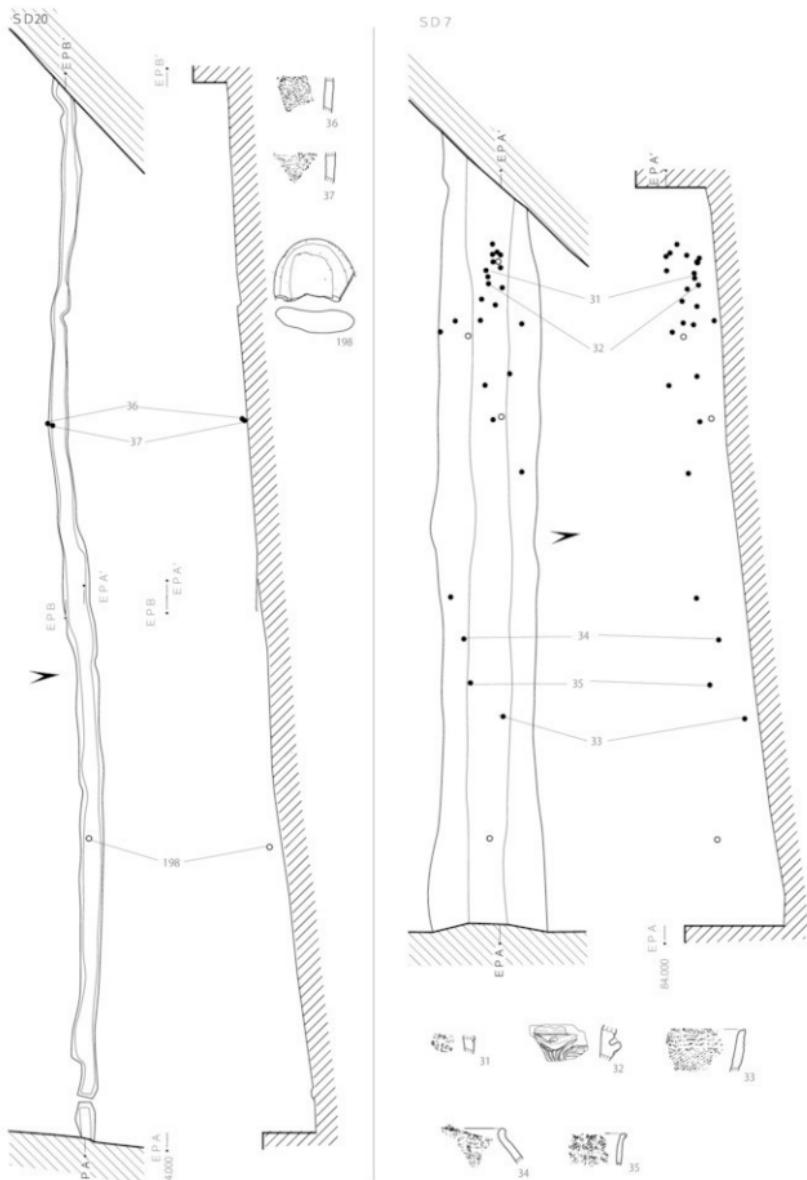
SD 3



個別遺構図⑨

圖版 10

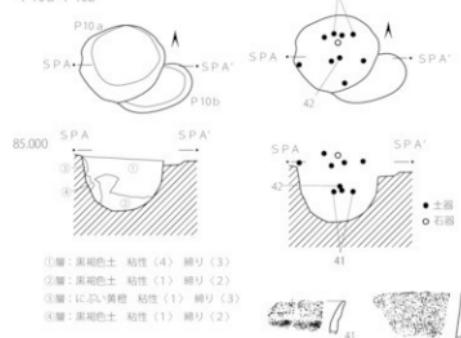




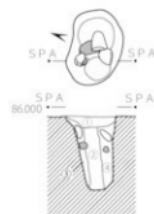
(1 : 60)

ピット

P10a・P10b

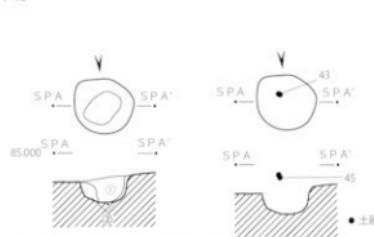


P15



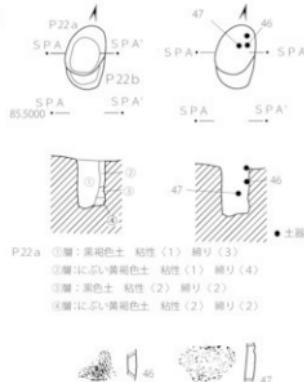
- ①層：褐灰土 粘性（2）繊り（5）
②層：黒褐色土 粘性（2）粘性（4）
③層：黒褐色土 粘性（2）粘性（2）
④層：灰黄褐色土 粘性（2）粘性（3）

P18



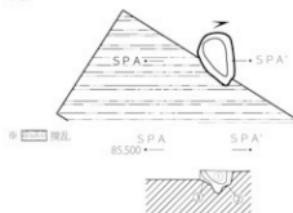
- P18 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）
②層：黑色土 粘性（2）繊り（3）

P22



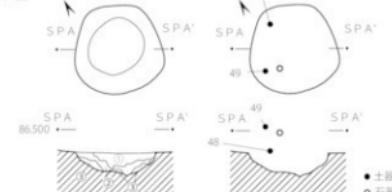
- P22a ①層：黄褐色土 粘性（1）繊り（3）
②層：にじみ黄褐色土 粘性（1）繊り（4）
③層：黑色土 粘性（2）繊り（2）
④層：にじみ黄褐色土 粘性（2）繊り（2）

P27



- P27 ①層：黑色土 粘性（2）繊り（2）
②層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）
③層：黄褐色土 粘性（2）繊り（3）

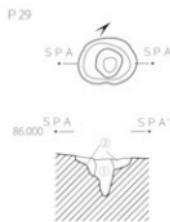
P28



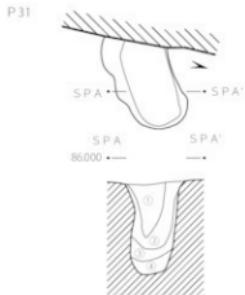
- P28 ①層：黒褐色土 粘性（3）繊り（5）
②層：にじみ黄褐色土 粘性（3）繊り（4）
③層：明黄褐色土 粘性（3）繊り（4）



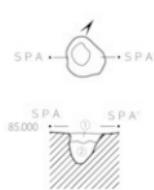
(1 : 40)



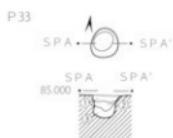
P29 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）
②層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）



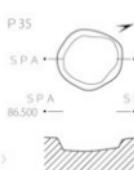
P31 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）
②層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）
③層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）
④層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）



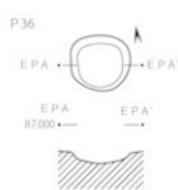
P32 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）
②層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）



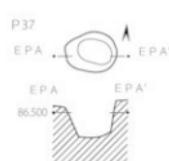
P33 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）
②層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）
③層：黒褐色土 粘性（2）繊り（2）



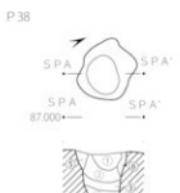
P35 SPA 86.500 SPA'



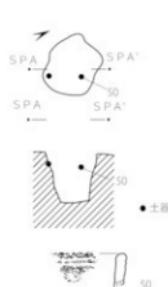
P36 EPA 87.000 EPA'



P37 EPA 86.500 EPA'



P38 ①層：黒褐色土 粘性（2）繊り（5）
②層：灰黄褐色土 粘性（2）繊り（3）
③層：灰黄褐色土 粘性（2）繊り（2）
④層：灰黄褐色土 粘性（2）繊り（3）
⑤層：にぶい黄褐色土 粘性（3）繊り（5）
⑥層：にぶい黄褐色土 粘性（3）繊り（5）

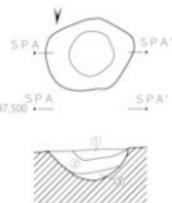


P39 ①層：褐灰色土 粘性（2）繊り（4）
②層：明黃褐色土 粘性（2）繊り（2）
③層：黑褐色土 粘性（2）繊り（3）
④層：にぶい黄褐色土 粘性（3）繊り（3）
⑤層：黑褐色土 粘性（3）繊り（4）

50

51

P41



97.500

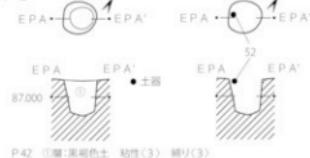


P41 ①層：にごい黄橙 粘性（1）繊り（3）

②層：黒褐色土 粘性（1）繊り（2）

③層：黒褐色土 粘性（2）繊り（3）

P42



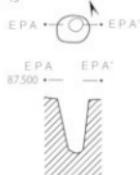
87.000

P42 ①層：黒褐色土 粘性（3）繊り（3）



52

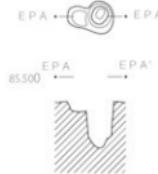
P43



87.500



P50



85.500



P51



86.000



P52



86.000



P53



86.000



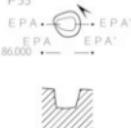
P54



86.000



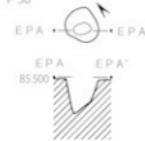
P55



86.000



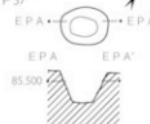
P56



85.500



P57

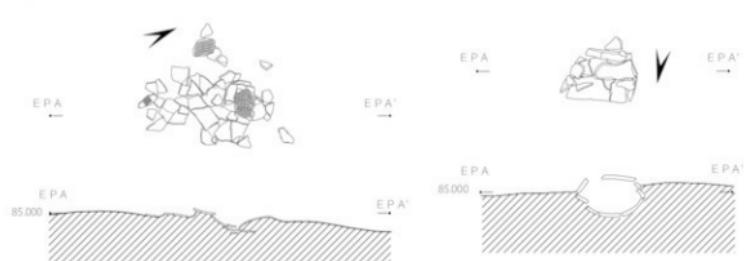


85.500

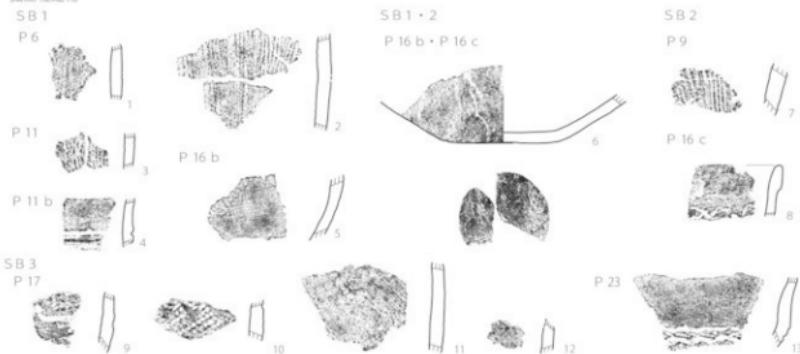


SX 1

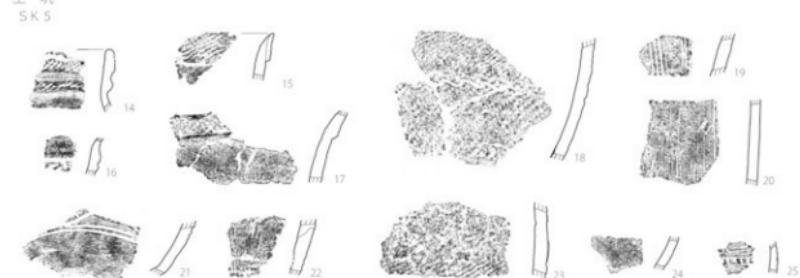




掘立柱建物



土坑



SK 8

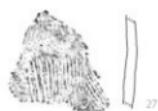


溝状遺構

SD 3



SK 26



SD 7



SD 20



SD 21



ピット

P. 10



P. 22



P. 28



P. 38



P. 39

P. 42

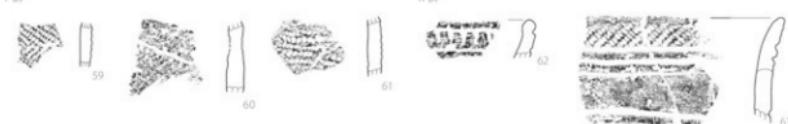
性格不明遺構

S X 1

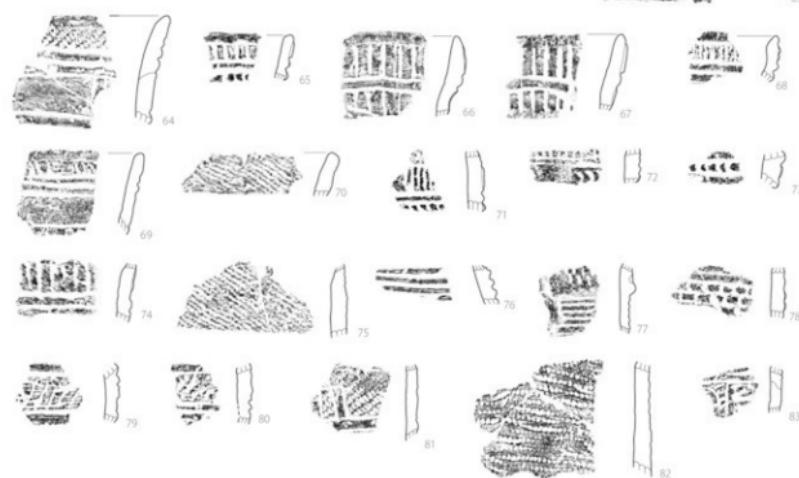


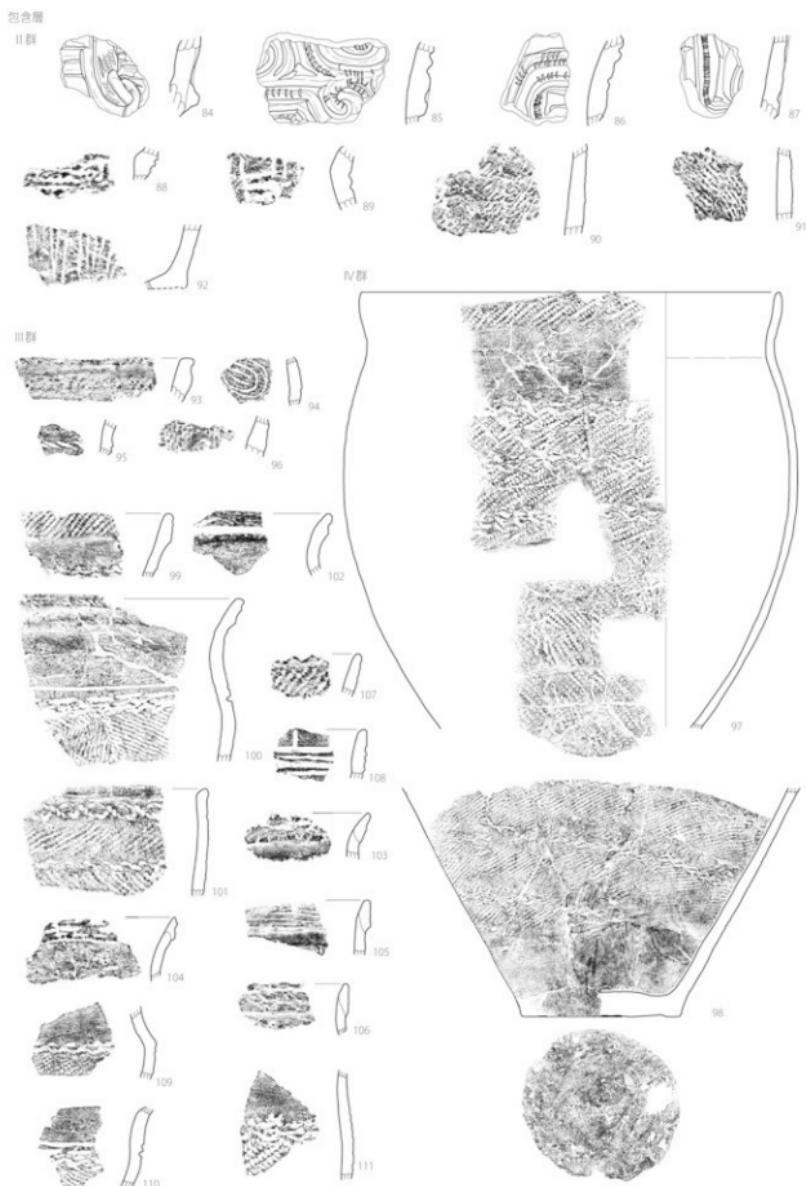
包含層

I群

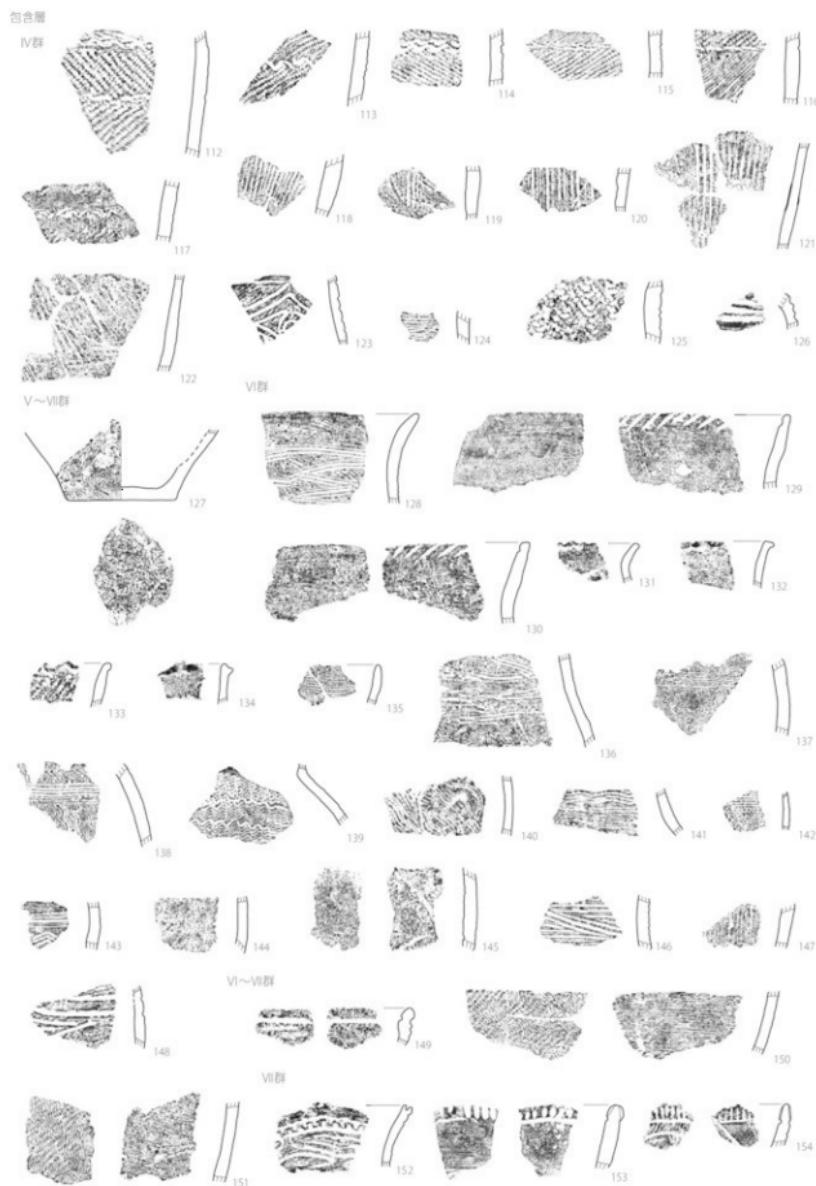


II群





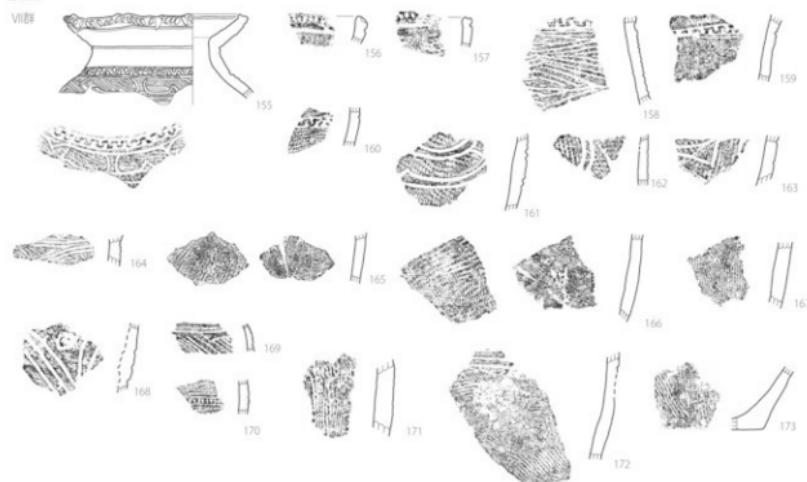
(84 ~ 92 + 99 ~ 111 = 1 / 3 ほか 1 / 6)



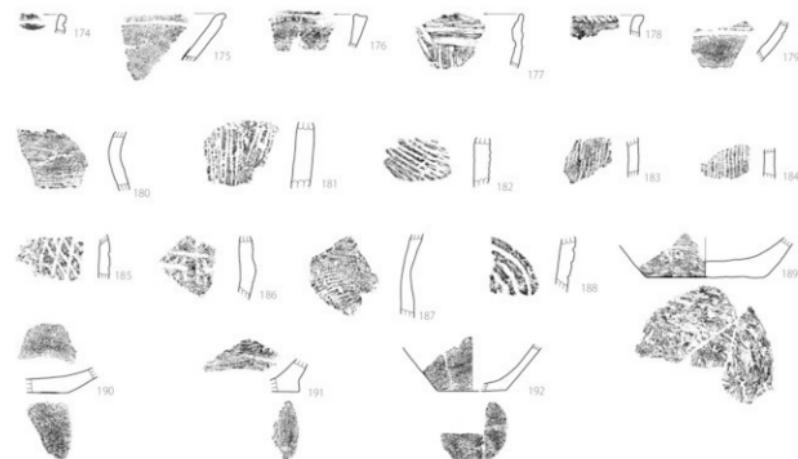
(112～154 1/3)

包含層

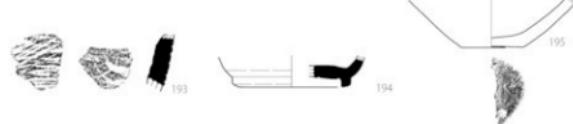
VII群



VIII群

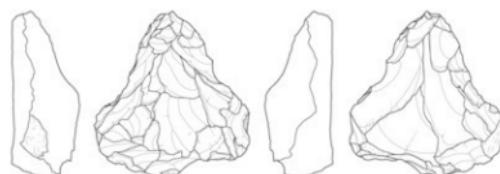


その他





196



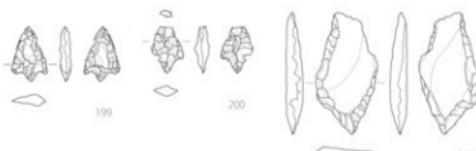
197



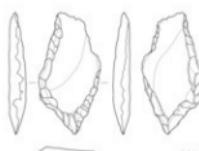
198



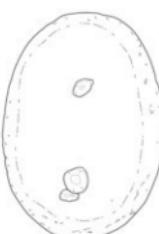
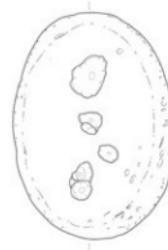
199



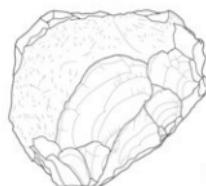
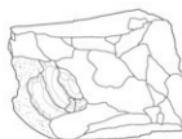
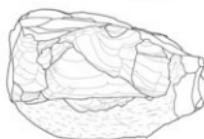
200



201



203



204

(196・199・200・201・202・203・204・205・206・207・208・209・210・211)



遺跡全景 北から



遺跡全景 真上から



遺跡全景 西から



遺跡全景 南から



表土掘削作業 北東から



表土剥ぎ作業 東から



ベルコン設置状況 西から



グリッド杭打ち作業 西から



西区包含層掘削作業 西から



西区包含層掘削作業 南西から



東区包含層掘削作業 東から



S X 掘削作業 南西から



SK 5 挖削作業 南から



P 6・P 9 挖削作業 北から



ピット完掘写真撮影作業 北から



ピット断面実測作業 西から



97 出土状況実測作業 東から



遺物測量作業 西から



空撮風景 北から



埋め戻し作業 西から



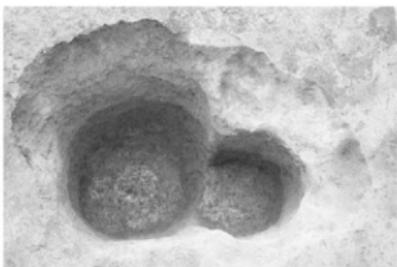
S B 1～3 完掘状態 真上から



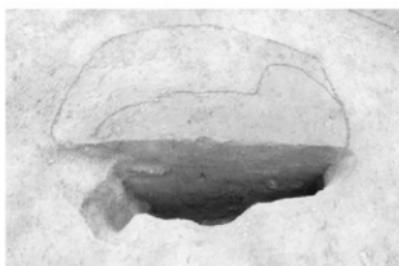
S B 1・2 人柱写真 北から



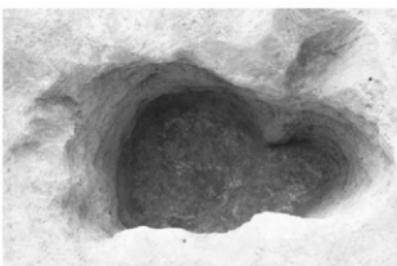
S K 19・P 6・P 9 半截状態 西から



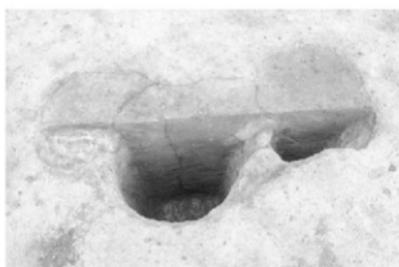
S K 19・P 6・P 9 完掘状態 東から



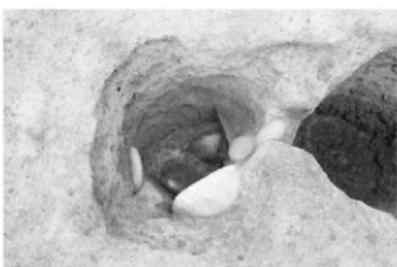
P 11 半截状態 東から



P 11 完掘状態 東から



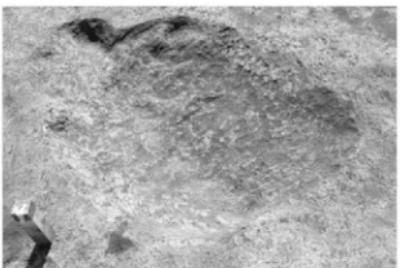
P 16 a・b・c 半截状態 北西から



P 16 c 根固め石検出状況 南東から



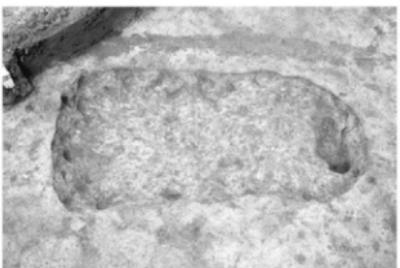
SK 5 半截状態 東から



SK 5 完整状態 東から



SK 8 半截状態 南西から



SK 8 完整状態 南西から



SK 40 確認状態 南から



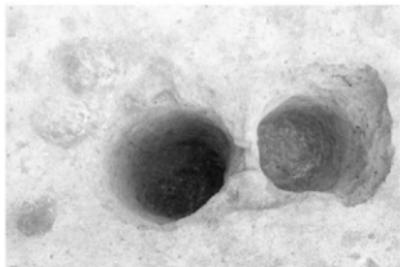
SK 40 半截状態 南から



SD 3 確認状態 南東から



SD 3 B ラインセクション 東から



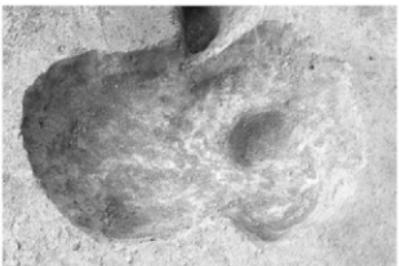
P 16 a・b・c 完掘状態 西から



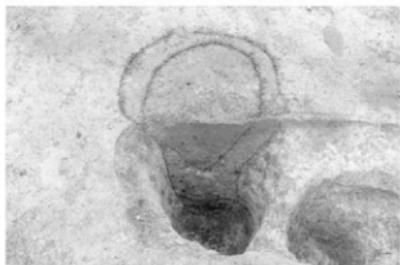
P 25 半截状態 北から



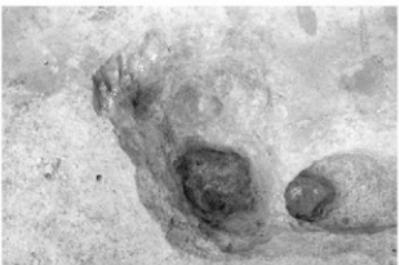
P 13 半截状態 南から



P 13 完掘状態 南から



P 17 半截状態 南から



P 17 完掘状態 南から



P 23 根固め石積出状態 南から



S 5 2 確認状態 南から



SD 3 完掘状態 西から



SD 7 確認状態 北東から



SD 7 A ラインセクション 北西から



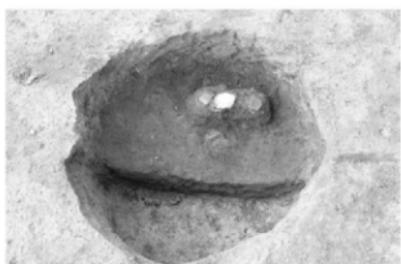
SD 7 完掘状態 西から



SD 20 B ラインセクション 南東から



SD 20 完掘状態 西から



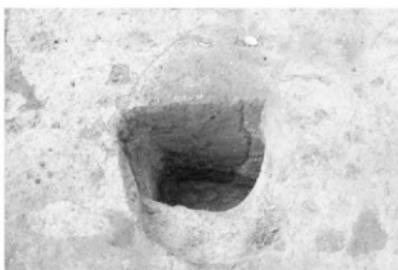
P 10 遺物出土状況 南から



P 15 根固め石棟出状態 西から



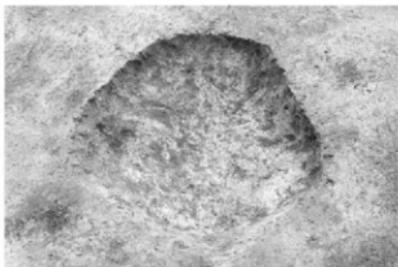
P 18 半截状態 北から



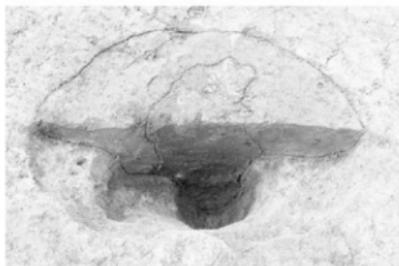
P 22 半截状態 南から



P 27 完掘状態 南東から



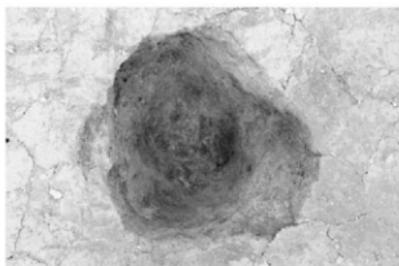
P 28 完掘状態 東から



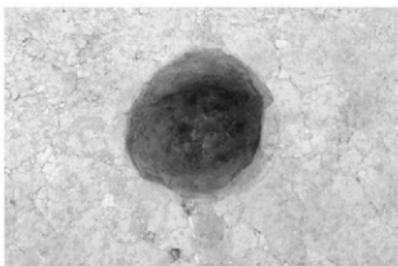
P 29 半截状態 南から



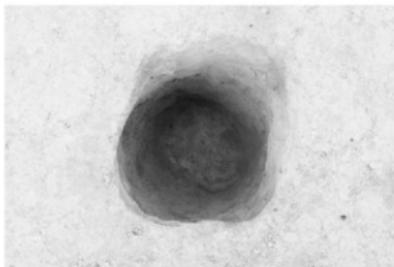
P 31 完掘状態 東から



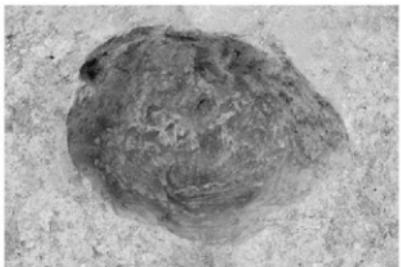
P 32 完掘状態 南から



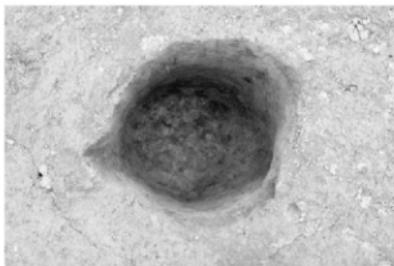
P 33 完掘状態 南から



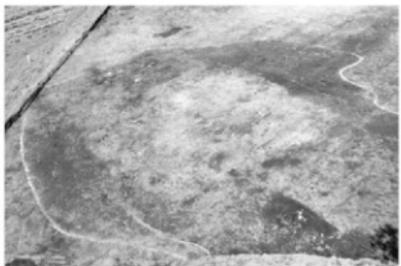
P 39 完掘状態 東から



P 41 完掘状態 北から



P 42 完掘状態 北から



SX 1 確認状態 南西から



SX 1 完掘状態 真上から



SX 1 完掘状態 北西から

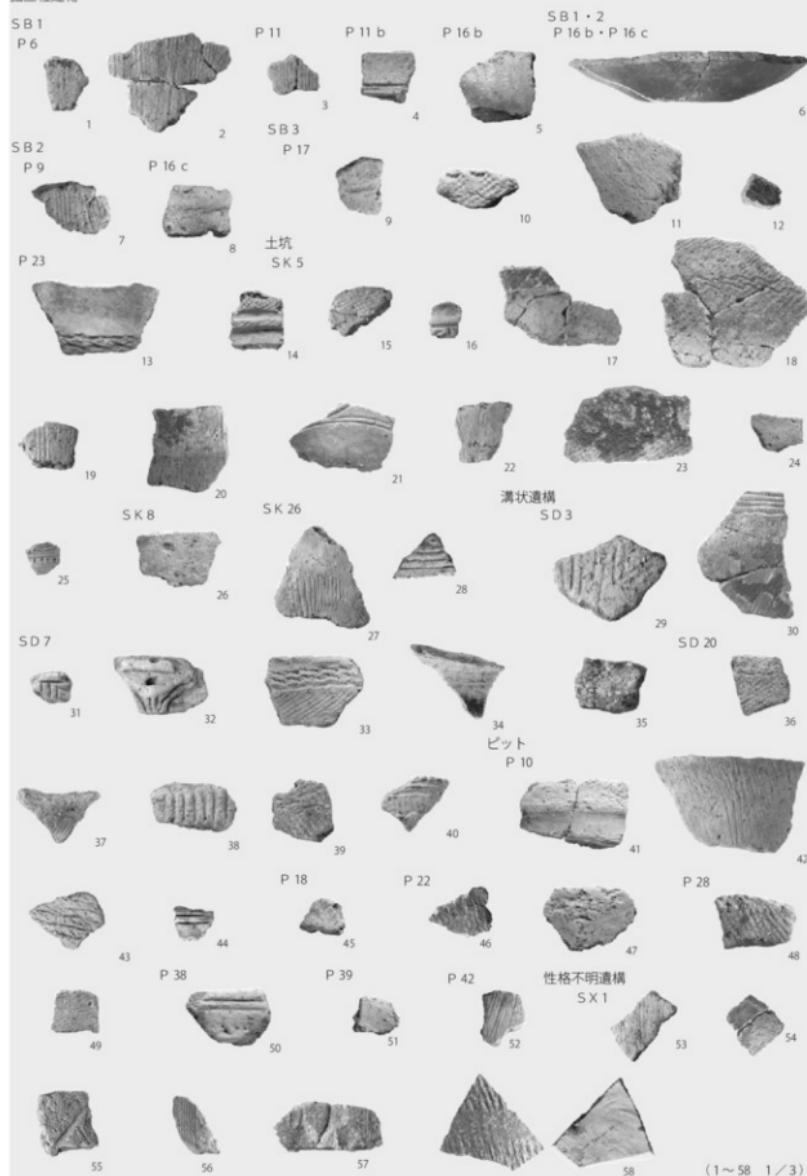


97 出土状態 南から



98 出土状態 西から

掘立柱建物



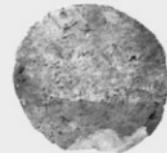
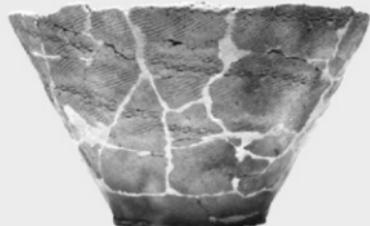
(1~58 1/3)

包含層

I群



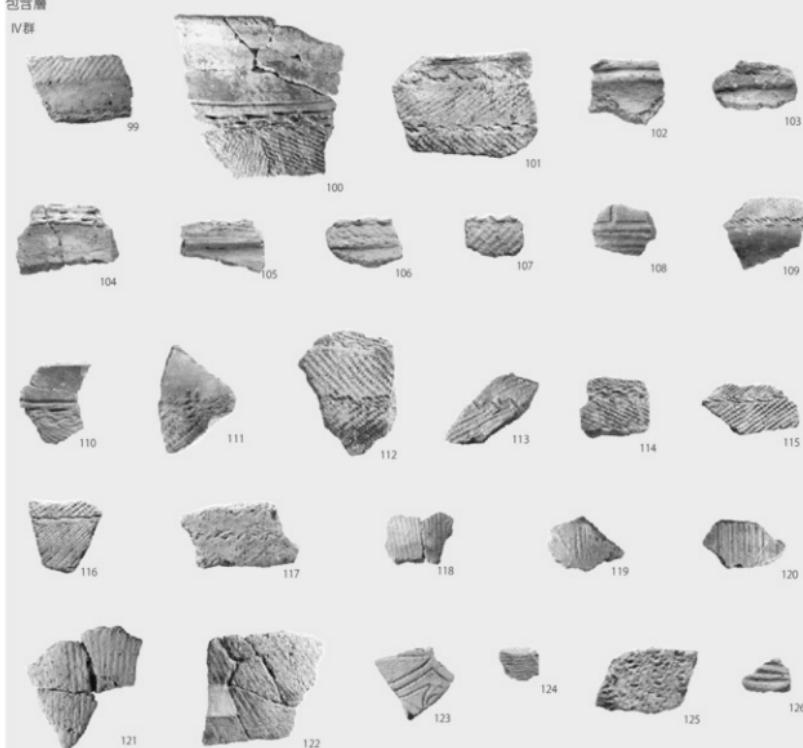
IV群



(59～96 1／3 ほか 1／6)

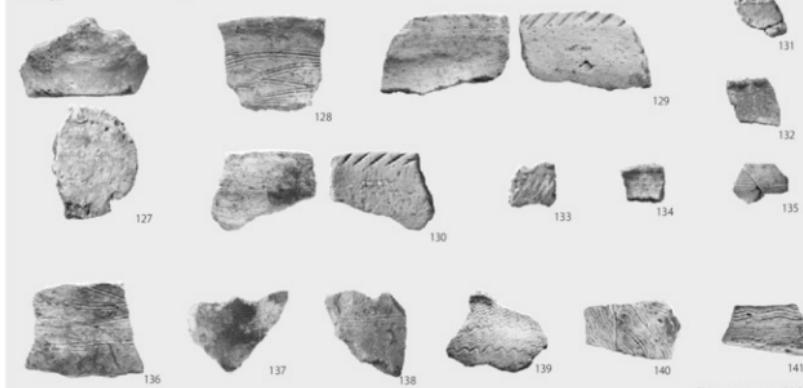
包含層

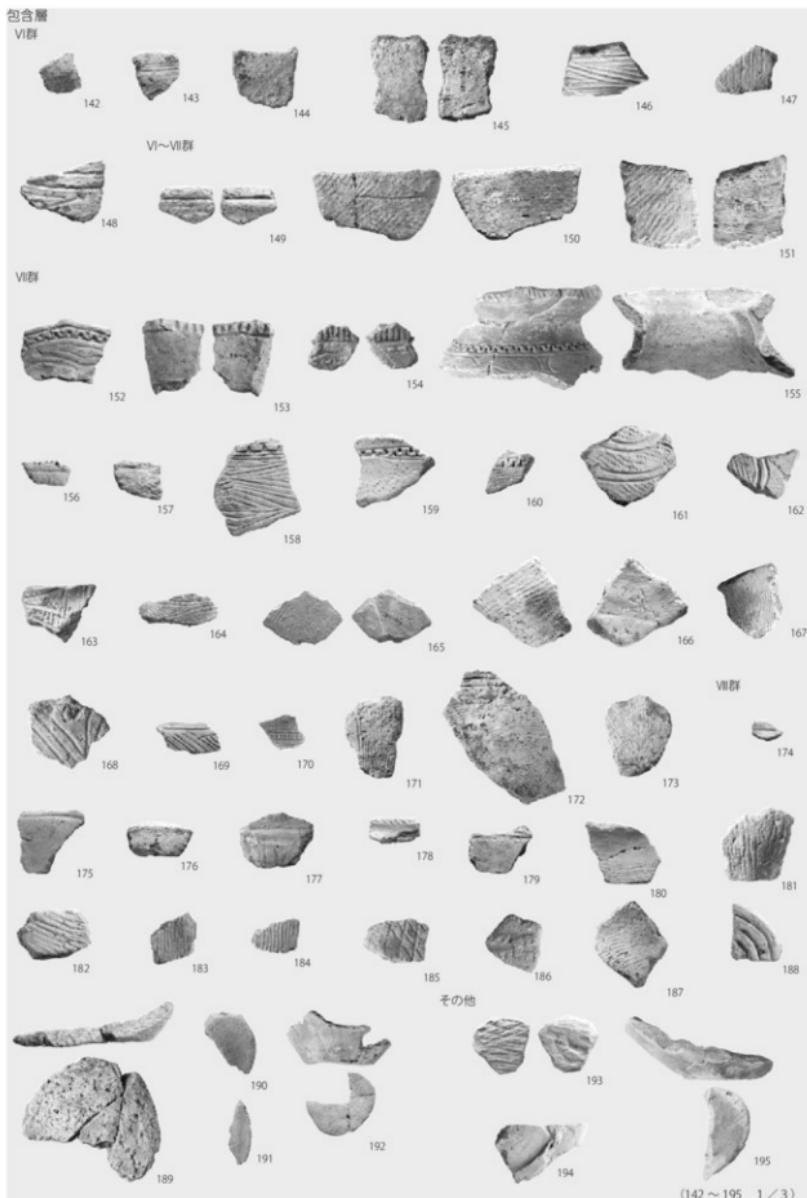
IV群



V～VII群

VI群







報告書抄録

ふりがな	たてぼこいせき							
書名	立矛遺跡							
副書名	市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則・石坂圭介・北村和徳							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2011年12月26日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
立矛遺跡	新潟県 長岡市 来迎寺3400番地 ほか	15021	412	37° 23' 28"	138° 46' 32"	20110509 ～ 20100616	1,760 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
立矛遺跡	遺物包含地	縄文時代晚期 ～弥生時代		柱立柱建物跡・ 構造遺構・ 土坑・ピット・ 集石遺構		縄文土器・弥生土器・ 須恵器・土師質土器・ 石器		なし

立矛遺跡

市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 23（2011）年 12 月 26 日 印刷

平成 23（2011）年 12 月 26 日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス
